

一般国道32号井川 IC 関連改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告

西州津遺跡
東州津遺跡

2 0 0 6

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
国土交通省 四国地方整備局

一般国道32号井川 IC 関連改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告

西州津遺跡
東州津遺跡

2 0 0 6

徳島県教育委員会
財團法人 徳島県埋蔵文化財センター
国土交通省 四国地方整備局



(1) 調査地遠景 (南から)



(2) 西州津遺跡 1区完掘状況 (北から)

卷頭図版2



(1) 東州津遺跡 SD1002 完掘状況 (東から)



(2) 東州津遺跡 SD1002 完掘状況 (東から)

序 文

本書は一般国道32号井川 IC 関連改良工事に伴い、平成11～14年度にかけて調査を実施した三好市池田町に所在する東州津遺跡・西州津遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。西州津遺跡は平成11年度に、東州津遺跡は平成11～14年度の4ヶ年をかけて調査を行いました。

この2遺跡は吉野川中流域北岸、讃岐山脈南麓に位置しており、両遺跡ともに縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されています。西州津遺跡は、中世を主体とする集落遺跡で、調査対象地のほぼ中央を自然流路が流れ、その両側に水田域が確認されています。また集落は、この自然流路を挟んだ東西の微高地に展開し、時期が下るにつれて集落の中心地が西へ移動する傾向にあり、中世の集落の動態を探るうえで好資料になるものと思われます。

東州津遺跡では、1974年（昭和49年）に吉野川北岸農業水利事業に伴う調査で、県内で初めて方形周溝墓が確認されました。今回の調査では、中世土器が出土するものの、最下層から弥生時代後期後葉の土器が出土した溝状道構を検出しています。また、包含層中から焼け損じの西村系須恵器碗が多く出土し、近隣に窯の存在が想定できます。

本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施および報告書作成に当たり、国土交通省をはじめとして関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは重要な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表すと共に、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成18年4月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
理事長 佐藤 勉

例　　言

1. 本書は一般国道32号井川 IC 関連改良工事に伴い、平成11（1999）年度から平成14（2002）年度にかけて調査を実施した西州津遺跡・東州津遺跡（三好市池田町所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国土交通省四国地方整備局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財團法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間

西州津遺跡	試掘一次	平成10年9月16日～平成10年10月6日
	試掘二次	平成11年4月6日～平成11年4月30日
	本 調 査	平成11年4月6日～平成12年3月15日
東州津遺跡	試掘一次	平成11年4月6日～平成11年4月30日
	試掘二次	平成12年2月7日～平成12年2月8日
	一次調査	平成11年5月7日～平成11年5月31日
	二次調査	平成13年1月4日～平成13年3月30日
	三次調査	平成14年1月4日～平成14年2月28日
	四次調査	平成14年11月1日～平成14年12月26日
・報告書作成期間		平成17年4月1日～平成18年3月31日

4. 造構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。

凡例

SA 掘立柱建物 SB 壁穴住居 SK 土坑 SO 窯
SP 柱穴 SQ 灰原 ST 墓 SX 不明造構

5. 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
6. 本書で用いた土層及び上器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1996年度版によった。
7. 遺物番号は全て通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
8. 第3図の地形図は建設省国土地理院発行の1/50,000の地形図「池田」を転載使用したものである。
9. 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会 国土交通省四国地方整備局 池田町

10. 本報告書の土器実測図で、断面白抜きは縄文土器・弥生土器・土師質土器、網掛けは瓦器、黒塗りは須恵器・須恵質土器・陶器・磁器を表す。
11. 遺物の掲載サイズは、土器は基本的に $1/3$ （大型の場合は、随時大きさを $1/4$ に変更）とし、土錘などの土製品および銭貨は $2/3$ 、鉄器・鉄滓は $1/2$ で掲載している。石器は石鎚・石錐・楔形石器などが $2/3$ 、その他の石器は大きさによって $1/2$ ～ $1/8$ で掲載している。
遺構は基本的に遺物出土状況図は $1/20$ （遺構が大きいものは $1/40$ ）、柱穴は $1/20$ 、土坑は $1/20$ ・ $1/40$ 、竪穴住居・掘立柱建物は $1/60$ もしくは $1/80$ 、溝の断面図は $1/40$ で掲載している。
12. 断面図における遺物のドットは、●は土器を、△は石を、■はその他（銭貨・鉄製品等）を表す。
13. 掘立柱建物の計測部位に関しては、次のように行った。
・相対的に長さの短い方を梁間、長い方を桁行とする。
・柱間寸法は柱穴掘り方の中心間の距離を計測し、最大値・最小値を表した。
・主軸方向は、桁行の方向を主軸とする。計測に関しては両端の梁間の柱間寸法をそれぞれ二等分し、その点を通る直線と真北との角度を計測した。
- 14 出土遺物の観察表に関して次のような表記である。
・器種が判別できるものは、可能な限り明記した。
・中近世で土師質の上器が出土しており、中世遺物は土師質土器、近世遺物は土師質とした。また「土師質土器片」の表記は、杯・椀等の供続具ではあるものの器種を確定できないものを、「須恵質土器片」は、椀以外の器種で確定できないものを表す。
・法量：（ ）は復元値を示す。石器・鉄器に関しては、遺存長を表す。
・成形・調整：基本的に口縁部から底部に向かって、成形・調整を記載した。
・胎土：胎土中、特に量が多いなどの目立つものに（多）をついている。
・残存率：復元した個所の全周 $\bigcirc/12$ で示した。口縁部・底部の部位が完形の場合は、1で表している。
・剥片の観察表に関しては、下記のように表している。
打面構成—a 自然面打面、b 単剥離打面、c 複剥離打面、d 線打面、e 点打面、f 不明
背面構成—a 右上部側縁部、b 右上半側縁部、c 右下半側縁部、d 右下部側縁部、e 左下部側縁部、f 左下半側縁部、g 左上半側縁部、h 左上部側縁部
打面欠損—a 完形、b 右側欠、c 左側欠、d 全欠、e 前端欠
側縁部欠損—a 右上部側縁部、b 右上半側縁部、c 右下半側縁部、d 右下部側縁部、e 左下部側縁部、f 左下半側縁部、g 左上半側縁部、h 左上部側縁部
15. 本書の執筆・編集を大北和美が担当した。また写真は遺物を大北が、遺構はそれぞれの調査担当者が撮影した。

本文目次

I	調査の経緯	
1	調査による経緯	3
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	9
2	歴史的環境	9
III	西州津遺跡	
III-1	調査の経過	
1	調査の経過	17
2	発掘調査の方法	17
3	調査日誌抄	21
III-2	調査成果	
1	基本層序	23
2	遺構と遺物	26
	掘立柱建物	
	竪穴住居	
	溝	
	土坑	
	柱穴	
	集石遺構	
	不明遺構	
	包含層出土遺物	
IV	東州津遺跡	
IV-1	調査の経過	
1	調査の経過	115
2	発掘調査の方法	115
3	調査日誌抄	116
IV-2	調査成果	
1	基本層序	118
2	遺構と遺物	121
(1)	第1遺構面	
	溝	

土坑	
窯	
柱穴	
自然流路	
不明遺構	
(2) 第二遺構面	158
土坑	
(3) 包含層出土遺物	161
V　まとめ	185

挿 図 目 次

第1図	西州津遺跡・東州津遺跡位置図	5
第2図	西州津遺跡・東州津遺跡周辺の遺跡分布図	10
第3図	西州津遺跡・東州津遺跡調査区位置図	18
第4図	西州津遺跡グリット配置図	19
第5図	西州津遺跡基本土層図(1)	24
第6図	西州津遺跡基本土層図(2)	25
第7図	西州津遺跡9~12区遺構配置図	27
第8図	西州津遺跡1・2区遺構配置図	29
第9図	SA1001・1002遺構図・出土遺物	31
第10図	SA1003・1004遺構図	33
第11図	SA1005・1006遺構図	34
第12図	SA1007・1008遺構図	36
第13図	SA1009・1010遺構図・出土遺物	37
第14図	SA1011・1012遺構図	38
第15図	SA1013遺構図	39
第16図	SB1001出土物出土状況図	41
第17図	SB1001遺構図	42
第18図	SB1001EP・EK断面図	43
第19図	SB1001EH遺構図・出土遺物	44
第20図	SB1001出土遺物	45
第21図	SB1001出土遺物(1)	46
第22図	SB1001出土遺物(2)	47
第23図	SD1001断面図	48
第24図	5~8区SI完掘状況図	51
第25図	3~4区SI完掘状況図	53
第26図	SI基本土層図(1)	55
第27図	SI基本土層図(2)	57
第28図	SK1019・1028遺構図・出土遺物	58
第29図	SK1030・1032遺構図・出土遺物	59
第30図	SK1035・1036遺構図・出土遺物	61
第31図	SK1038・1041遺構図・出土遺物	62
第32図	SK1055・1056遺構図・出土遺物	63
第33図	SK1064・1085・1102遺構図・出土遺物	65
第34図	SK1103遺構図・出土遺物	66
第35図	SK1107・1124遺構図・出土遺物	67
第36図	SK1167遺構図・出土遺物	68
第37図	SP遺構図・出土遺物(1)	69
第38図	SP遺構図・出土遺物(2)	71
第39図	SP遺構図・出土遺物(3)	73
第40図	SP遺構図・出土遺物(4)	74
第41図	SP出土遺物(1)	75
第42図	SP出土遺物(2)	77
第43図	SR1007遺構図	78
第44図	SR1007断面図	79
第45図	SR1007出土遺物	82
第46図	SR1007・1008断面図	84
第47図	ST1002・1012遺構図・出土遺物	84
第48図	ST1015・1016遺構図・出土遺物	85
第49図	ST1017遺構図・出土遺物	86
第50図	ST1036遺構図・出土遺物	88
第51図	ST1037・1049遺構図・出土遺物	89
第52図	ST1054・1057遺構図・出土遺物	90
第53図	ST1058・1060遺構図・出土遺物	91
第54図	ST1068・1071遺構図	92
第55図	ST1089・1090遺構図	93
第56図	SU1001石核出狀況図	94
第57図	SU1001出土遺物(1)	95
第58図	SU1001出土遺物(2)	96
第59図	SU1001出土遺物(3)	97
第60図	SX1002・1007・1010遺構図・出土遺物	98
第61図	SX1013遺構図・出土遺物	99
第62図	SX1019・1025遺構図・出土遺物	100
第63図	SX1026遺構図・出土遺物	102
第64図	包含層出土遺物(土器)(1)	103
第65図	包含層出土遺物(土器)(2)	104
第66図	包含層出土遺物(土器)(3)	105
第67図	包含層出土遺物(土器・石器)	106
第68図	包含層出土遺物(石器)(1)	108
第69図	包含層出土遺物(石器)(2)	109
第70図	包含層出土遺物(鉄製品)	110
第71図	側溝出土遺物	111
第72図	試掘トレンチ出土遺物	111
第73図	機械掘削出土遺物	112
第74図	東州津遺跡グリット配置図	116
第75図	東州津遺跡基本土層図(1)	119
第76図	東州津遺跡基本土層図(2)	120
第77図	東州津遺跡基本土層図(3)	121
第78図	東州津遺跡遺構配置図(第1面)	123
第79図	SD1001断面図・出土遺物	125
第80図	SD1001・1002完掘状況図	127
第81図	SD1002断面図	129
第82図	SD1002出土遺物(土器)(1)	131
第83図	SD1002出土遺物(土器)(2)	132
第84図	SD1002出土遺物(土器)(3)	133
第85図	SD1002出土遺物(土器)(4)	134
第86図	SD1002出土遺物(土器)(5)	135
第87図	SD1002出土遺物(石器)(1)	136
第88図	SD1002出土遺物(石器)(2)	137
第89図	SD1002出土遺物(石器)(3)	138
第90図	SD1002出土遺物(石器)(4)	139
第91図	SD1003遺構図	141
第92図	SD1003出土遺物	142
第93図	SD1004・1005断面図・出土遺物	143
第94図	SK1001・1002遺構図・出土遺物	144
第95図	SO1001遺構図	146
第96図	SP1003遺構図・出土遺物	146
第97図	SR1001遺構図	147
第98図	SR1001遺構出土状況図	149
第99図	SR1001出土遺物(土器)	151
第100図	SR1001出土遺物(石器)(1)	152
第101図	SR1001出土遺物(石器)(2)	153
第102図	SR1001出土遺物(石器)(3)	154
第103図	SR1001出土遺物(石器)(4)	155
第104図	SR1001出土遺物(石器)(5)	156

第105回	SX1001遺構図・出土遺物	157
第106回	東州津跡遺構配置図(第二面)(1/200)	158
第107回	SK2001遺構図・出土遺物	159
第108回	SK2002遺構図・出土遺物	160
第109回	00-1区包含層・鰐渓出土遺物	161
第110回	00-2区包含層出土遺物(1)	163
第111回	00-2区包含層出土遺物(2)	164
第112回	00-2区包含層出土遺物(3)	165
第113回	00-2区包含層出土遺物(4)	166
第114回	00-2区包含層出土遺物(5)	167
第115回	00-2区包含層出土遺物(6)	168
第116回	00-2区包含層出土遺物(7)	169
第117回	00-2区包含層出土遺物(8)	170
第118回	00-2区側溝出土遺物	172
第119回	01-1区包含層出土遺物(1)	173
第120回	01-1区包含層出土遺物(2)	174
第121回	01-1区包含層出土遺物(3)	176
第122回	01-1区側溝出土遺物	176
第123回	01-2・2区包含層出土遺物(1)	177
第124回	01-2・2区包含層出土遺物(2)	178
第125回	01-2・3区包含層出土遺物	179
第126回	02-1区包含層出土遺物	180
第127回	02-1区側溝出土遺物	180
第128回	機械掘削出土遺物	181

表 目 次

西州津遺跡

第1表	検出遺構一覧表	掘立柱建物	193
第2表	検出遺構一覧表	掘立柱建物柱穴	193
第3表	検出遺構一覧表	堅穴住居	196
第4表	検出遺構一覧表	堅穴住居内柱穴	196
第5表	検出遺構一覧表	堅穴住居内火炉	196
第6表	検出遺構一覧表	堅穴住居内柱穴	196
第7表	検出遺構一覧表	溝	197
第8表	検出遺構一覧表	土坑	197
第9表	検出遺構一覧表	柱穴	201
第10表	検出遺構一覧表	自然流路	231
第11表	検出遺構一覧表	窓	231
第12表	検出遺構一覧表	集石遺構	233
第13表	検出遺構一覧表	不明遺構	234
第14表	出土遺物観察表	(土器)	235
第15表	出土遺物観察表	(鉄製品)	245
第16表	出土石器観察表	(石礫)	245
第17表	出土石器観察表	(楔形石器)	246
第18表	出土石器観察表	(石錐)	246
第19表	出土石器観察表	(削器・石燧)	246
第20表	出土石器観察表	(石刀)	246
第21表	出土石器観察表	(石斧)	246
第22表	出土石器観察表	(石鎌)	247
第23表	出土石器観察表	(石刃)	247
第24表	出土石器観察表	(剥片)	247
第25表	出土石器観察表	(敲石)	248
第26表	出土石器観察表	(磨石)	248

図 版 目 次

巻頭図版1	(1) 調査地風景(西から)	
	(2) 西州津遺跡1区完掘状況(北から)	
巻頭図版2	(1) 東州津遺跡SD1002完掘状況(東から)	
	(2) 東州津遺跡SD1002完掘状況(東から)	
西州津遺跡		
図版1	(1) 調査前風景(西から)	249
	(2) 1区調査区完掘状況(西から)	
図版2	(1) 1区東端上塙草部完掘状況(北から)	250
	(2) 2区調査区完掘状況(西から)	

東州津遺跡

第27表	検出遺構一覧表	溝	295
第28表	検出遺構一覧表	土坑(第一道構面)	295
第29表	検出遺構一覧表	窓	295
第30表	検出遺構一覧表	柱穴(第一道構面)	295
第31表	検出遺構一覧表	自然流路	300
第32表	検出遺構一覧表	不明遺構	300
第33表	検出遺構一覧表	土坑(第二道構面)	300
第34表	検出遺構一覧表	柱穴(第二道構面)	300
第35表	出土遺物観察表	(上器)	301
第36表	出土遺物観察表	(鉄製品)	320
第37表	出土石器観察表	(石錐)	320
第38表	出土石器観察表	(石錐)	321
第39表	出土石器観察表	(楔形石器)	321
第40表	出土石器観察表	(石錐)	322
第41表	出土石器観察表	(削器・石匙)	323
第42表	出土石器観察表	(石板)	323
第43表	出土石器観察表	(石斧)	323
第44表	出土石器観察表	(石鏟)	323
第45表	出土石器観察表	(石錐)	324
第46表	出土石器観察表	(台石)	324
第47表	出土石器観察表	(砥石)	324
第48表	出土石器観察表	(石核)	324
第49表	出土石器観察表	(剥片)	324
第50表	出土石器観察表	(敲石)	326
第51表	出土石器観察表	(磨石)	326

図 版 目 次

図版3	(1) 3-1区調査区完掘状況(西から)	251
	(2) 3-2区調査区完掘状況(西から)	
図版4	(1) 4-1区調査区完掘状況(東から)	252
	(2) 4-2・2区遺構検出状況(東から)	
図版5	(1) 4-2・2区調査区完掘状況(東から)	253
	(2) 4-3区調査区完掘状況(西から)	
図版6	(1) 5区調査区完掘状況(東から)	254
	(2) 6-1区調査区完掘状況(東から)	
図版7	(1) 6-2区水田完掘状況(東から)	255

図版8	(1) 6 - 4 区水田完掘状況（北から）	255	図版28	(1) SX1024遺物出土状況（東から）	276
	(2) 7 - 1 区調査区完掘状況（東から）			(2) 3 - 1 区北壁土層堆積状況	
図版9	(1) 7 - 2 区溝渠区完掘状況（東から）	257		(3) 4 - 1 区西壁土層堆積状況	
	(2) 7 - 3 区調査区完掘状況（西から）		図版29	(1) 4 - 2 区南壁土層堆積状況	277
図版10	(1) 8 区調査区完掘状況（東から）	258		(2) 4 - 3 区南壁土層堆積状況	
	(2) 9 区調査区完掘状況（北から）			(3) 5 区南壁土層堆積状況	
図版11	(1) 10 区調査区完掘状況（西から）	259	図版30	(1) 6 - 1 区北壁土層堆積状況	278
	(2) 11 - 12 区調査区完掘状況（東から）			(2) 6 - 2 区西壁土層堆積状況	
図版12	(1) SA1001完掘状況（東から）	260		(3) 6 - 3 区北壁土層堆積状況	
	(2) SA1006完掘状況（西から）		図版31	(1) 6 - 4 区西壁土層堆積状況	279
	(3) SA1007完掘状況（西から）			(2) 7 区南壁土層堆積状況	
図版13	(1) SA1008完掘状況（西から）	261		(3) 7 - 2 区東壁土層堆積状況	
	(2) SA1009完掘状況（西から）		図版32	(1) 7 - 3 区南壁土層堆積状況	280
	(3) SA1009EP 3 遺物出土状況（南から）			(2) 8 区南壁土層堆積状況	
図版14	(1) SA1010完掘状況（西から）	262		(3) 9 区南壁土層堆積状況	
	(2) SA1012完掘状況（北から）		図版33	(1) 10 区南壁土層堆積状況	281
	(3) SA1012根石出土状況（北から）			(2) 11 - 12 区北壁土層堆積状況	
図版15	(1) 柱痕検出状況（南から）	263	図版34	(1) SA1009出土七器	282
	(2) SB1001遺構内遺構検出状況（北から）			(2) SB1001出土土器	
図版16	(1) SB1001遺物出土状況（北から）	264		(3) SB1001出土石器	
	(2) SB1001完掘状況（西から）		図版35	(1) SB1001EH 出土遺物	283
図版17	(1) SB1001EH 遺物出土状況（西から）	265		(2) SK 出土土器	
	(2) 7 - 3 区 SD1001完掘状況（西から）		図版36	SP 出土土器	284
	(3) 8 区 SD1001完掘状況（東から）		図版37	(1) SP 出土石器	285
図版18	(1) 7 - 3 区 SD1001土層堆積状況（東から）	266		(2) SR1007出土石器	
	(2) 8 区 SD1001土層堆積状況（西から）			(3) ST 出土遺物	
	(3) SK1032遺物出土状況（北から）		図版38	(1) SU1001出土遺物	286
図版19	(1) SK1102遺物出土七状況（東から）	267		(2) SK 出土土器	
	(2) SK1103遺物出土状況（南から）			(3) SX 出土七器	
	(3) SP1109遺物出土木片状況（南から）		図版39	包含層出土土器（繩文土器、弥生土器、土師質土器、十鍾）	287
図版20	(1) SP1195遺物出土状況（南から）	268			
	(2) SP1699遺物出土状況（西から）		図版40	(1) 包含層出土土器（土師質土器）	288
	(3) SP1712遺物出土状況（西から）			(2) 包含層出土土器（須恵質土器、瓦質土器）	
図版21	(1) SP11062遺物出土状況（南から）	269	図版41	(1) 包含層出土土器（須恵質土器、青磁、白磁）	289
	(2) SP11094遺物出土状況（南から）			(2) 包含層出土遺物（鉄鋤、鉄製品）	
	(3) 7 - 3 区 SR1007完掘状況（北から）		図版42	(1) 包含層出土土器（石器、楔形石器、削器）	290
図版22	(1) SR1007北壁土層堆積状況	270			
	(2) SR1007出土木片（南から）			(2) 包含層出土土器（敲石）	
	(3) SR1008完掘状況（東から）			(3) 横彫掘削出土石器（石錐）	
図版23	(1) ST1002集石出土状況（南から）	271	図版43	(1) 包含層出土土器（石斧）	291
	(2) ST1002完掘状況			(2) 試掘トレンチ出土遺物	
	(3) ST1015 - 1016完掘状況（南から）				
図版24	(1) ST1017完掘状況（東から）	272			
	(2) ST1030集石出土状況（東から）				
	(3) ST1036遺物出土状況（東から）				
図版25	(1) ST1049遺物出土状況（北から）	273			
	(2) ST1054人頭？出土状況				
	(3) ST1058集石出土状況（東から）				
図版26	(1) ST1071集石出土状況（東から）	274			
	(2) SU1001集石出土状況（西から）				
	(3) SX1007完掘状況（東から）				
図版27	(1) SX1010完掘状況（北から）	275			
	(2) SX1013完掘状況（北から）				
	(3) SX1019完掘状況（東から）				

(2) 00・2区第二遺構面完掘状況（西から）	332
国版50 (1) SD1001完掘状況（東から）	333
(2) SD1001土層堆積状況（南から）	
(3) SD1003～1005完掘状況（東から）	
国版51 (1) SD1003ベルトE土層堆積状況（西から）	334
(2) SD1003・1004土層堆積状況（東から）	
(3) SD1005土層堆積状況（西から）	
国版52 (1) 99-1区 SD1002検出状況（東から）	335
(2) 00-1区 SD1002完掘状況（西から）	
国版53 (1) 00-1区遺構完掘状況（北から）	336
(2) 00-1区 SD1002ベルトA土層堆積状況（北から）	
国版54 (1) 00-1区 SD1002ベルトB土層堆積状況（北から）	337
(2) 99-1区 SD1002ベルトC土層堆積状況（南から）	
国版55 (1) 99-1区 SD1002ベルトD土層堆積状況（東から）	338
(2) 99-1区 SD1002ベルトF土層堆積状況（西から）	
国版56 (1) 00-1区 SD1002遺物出土状況（西から）	339
(2) 99-1区 SD1002遺物出土状況1（南から）	
国版57 (1) 99-1区 SD1002遺物出土状況2（東から）	340
(2) 99-1区 SD1002遺物出土状況3（南から）	
国版58 (1) 99-1区 SD1002遺物出土状況4（北から）	341
(2) 99-1区 SD1002遺物出土状況5（西から）	
国版59 (1) SK1001遺物出土状況（南から）	342
(2) SK1002遺物出土状況（南から）	
(3) SO1001完掘状況（南から）	
国版60 (1) SO1001上層堆積状況（西から）	343
(2) 01-1区 SR1001集石検出状況（北から）	
(3) 01-1区 SR1001土層堆積状況（西から）	
国版61 (1) 02-1区 SR1001完掘状況（東から）	344
(2) 02-1区 SR1001土層堆積状況（西から）	
(3) SX1001完掘状況（南から）	344
国版62 (1) SK2001完掘状況（北から）	345
(2) SK2002遺物出土状況（北から）	
(3) SK2002完掘状況（北から）	
国版63 (1) 01-2・1区遺物出土状況（南から）	346
(2) 01-2・2区遺物出土状況	
(3) 00-2区確認トレント東壁上層堆積状況	
国版64 (1) 99-1区南壁上層堆積状況	347
(2) 00-2区北壁土層堆積状況1	
(3) 00-2区北壁上層堆積状況2	
国版65 (1) 00-2区南壁土層堆積状況	348
(2) 01-1区東壁上層堆積状況	
(3) 01-1区南壁土層堆積状況	
国版66 (1) 01-2・3区西壁上層堆積状況	349
(2) 02-1区南壁上層堆積状況	
(3) 02-1区北壁土層堆積状況	
国版67 SD1002出土土器(1)	350
国版68 SD1002出土土器(2)	351
国版69 SD1002出土土器(3)	352
国版70 SD1002出土土器・鉄製品・石器	353
国版71 (1) SD1002出土石器	354
(2) SD1003出土石器	
国版72 (1) SR1001出土土器・土製品	355
(2) SR1001出土石器（石錐・石錐）	
国版73 (1) SR1001出土石器	356
(2) SK2001出土石器	
国版74 包含層出土土器（土師質土器）	357
国版75 包含層出土土器（黒色土器・須恵質土器）	
国版76 包含層出土土器（須恵質土器）(1)	358
国版77 包含層出土土器（須恵質土器）(2)	359
国版78 (1) 包含層出土土器（須恵質土器）(3)	360
(2) 包含層出土土器（瓦器）	
国版79 包含層出土土器（須恵器・瓦質土器・青磁・白磁・土錐）	362
国版80 包含層出土土器(1)	363
国版81 (1) 包含層出土土器(2)	364
(2) 包含層出土鉄製品	

写 真 目 次

西洲津遺跡

写真1 作業風景	22
写真2 積雪状況	22

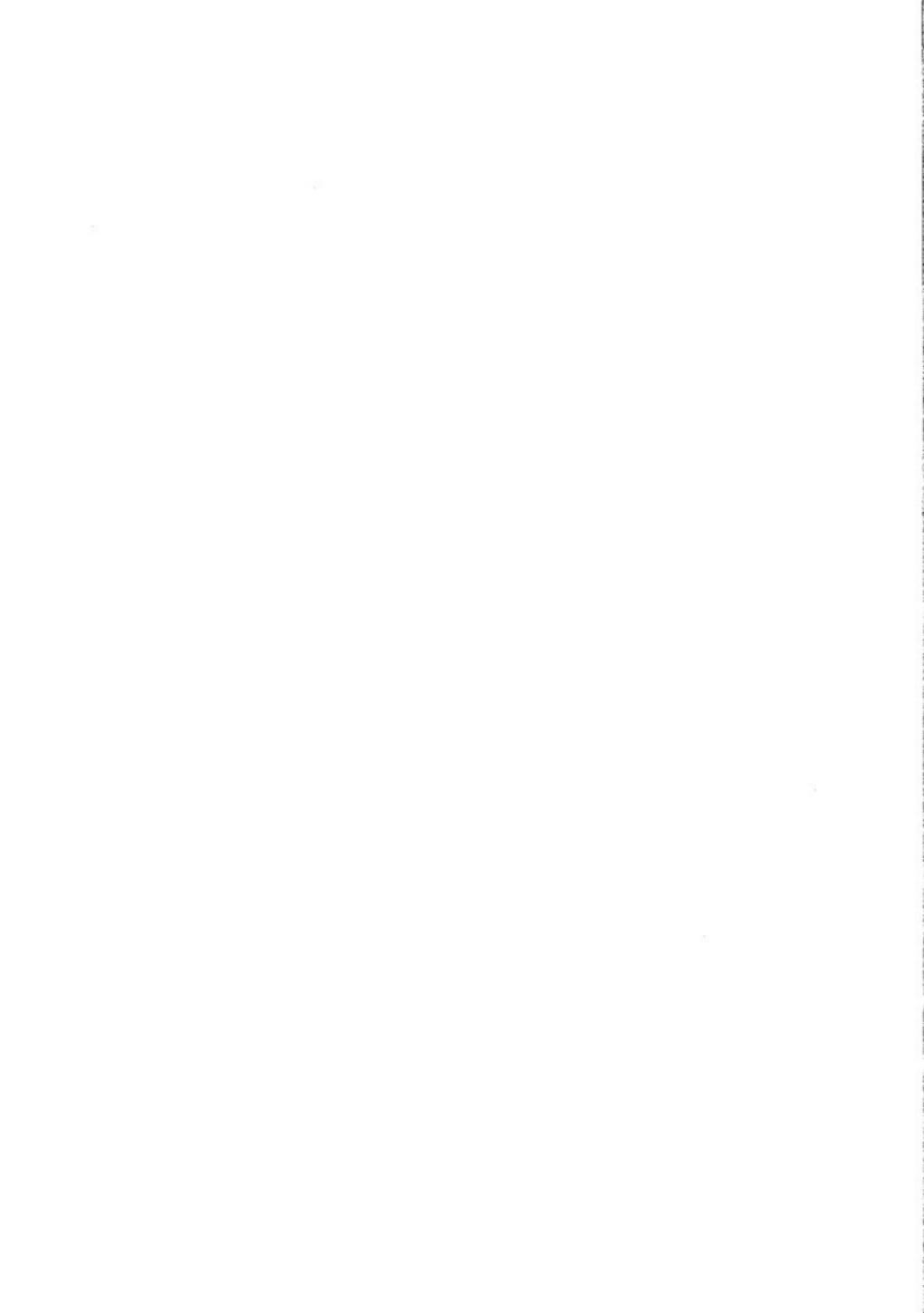
東洲津遺跡

写真1 SD1001掘削作業	116
写真2 積雪状況	117
写真3 作業風景	117

附 図

- 附図1 SD1001・SD1002遺物出土状況図
附図2 SD1002遺物出土状況図

I 調査の経緯



1 調査にいたる経緯

2000（平成12）年、四国縦貫自動車道が、徳島県徳島市から愛媛県大洲市までいよいよ全線開通することになった。それまで部分供用だったが、四国縦貫自動車道という路線の新設は各地に影響を与え、自動車道周辺の道路整備事業が実施されるようになった。

自動車道が通る池田町・井川町もその例外ではなく、井川インターチェンジ設置に伴い、香川県高松市を起点とし、高知県高知市を終点とする一般国道32号線の改良工事が実施されることになった。

一般国道32号線は、徳島県内では吉野川によって形成された河岸段丘上や讃岐山脈・四国山地の山腹を走る。吉野川北岸にある河岸段丘は段丘面が三段認められ、その中位段丘面上では旧石器から弥生時代の遺物の散布が認められるほか、1974（昭和49）年に吉野川北岸水利事業関係に伴う調査によって確認された州津遺跡が、また吉野川により近い低位段丘面上では、県内で初めて方形周溝墓が確認された東州津遺跡が所在し、県西部では遺跡が集中する地域の一つである。

そこで工事施工に先立ち、徳島県教育委員会からの委託を受け、路線内の遺跡の有無、および範囲の確認等を目的として、（財）徳島県埋蔵文化財センターが試掘調査・発掘調査を実施した。また調査対象地の用地取得状況等に応じて試掘調査を実施したが、センターで速やかな対応が困難であった時は、徳島県教育委員会文化財課により、平成12年度の6月と10月の2回に分けて試掘調査を実施している。

試掘調査の結果を受け、調査区は一部の未調査区間を挟むものの、一般国道32号線沿いに設定された。河岸段丘は吉野川の支流である鮎谷川による開析をうけ、鮎谷川を挟んで段丘の西側にある遺跡を西州津遺跡、東側にある遺跡を東州津遺跡と呼称することになった。発掘調査は、西州津遺跡は平成11

（1999）年度で終了、東州津遺跡は短期間の調査を平成11～14（1999～2002）年度の4年かけて行い、終了した。

また調査報告書作成業務が平成17（2005）年4月から開始され、遺跡の立地および字名から、遺跡名変更の可能性を小曇されたが、同年5月に文化財課からそのまま踏襲する旨の指示があった。

調査組織及び整理体制は以下である。

総括

所長	寒川 光明（平成10～12年度）	本淨 敏之（平成13～15年度）
	浦上 純二（平成16・17年度）	
事務局長	細川 靖夫（平成10・11年度）	伊丹 康裕（平成12・13年度）
	西村 和博（平成14・15年度）	河野 幸一（平成16・17年度）
総務課長	井後 伸一（平成10・11年度）	高野 明（平成12・13年度）
	山本 高史（平成14・15年度）	古川 哲朗（平成16・17年度）
主査兼総務係長	福本紀美子（平成12～14年度）	坂尾 俊一（平成15～17年度）
主事	集堂 正士（平成10・11年度）	佐藤 真紀（平成10・11年度）
	田所 政儀（平成12・13年度）	布川 純子（平成14・15年度）
	鈴木 智栄（平成14～16年度）	川口 治代（平成16・17年度）
	浦川 明美（平成17年度）	

技 師 大西 孝司（平成10年度） 小田 祥雄（平成11年度）
國原 義則（平成12・13年度） 原田 敏夫（平成13・14年度）
調査課長 萩原 康夫（平成10～14年度）
調査第一課長 光山 忠幸（平成12・13年度）
調査第二課長 武市 文雄（平成10・11年度）（主査兼）
調査係長 新居 文和（平成14年度）

調査担当

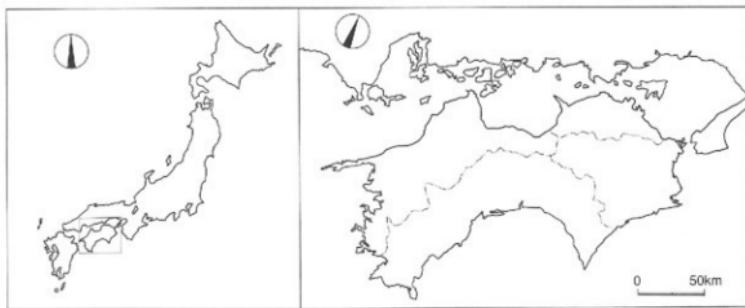
・試掘調査担当
　・西州津遺跡
　　研究員 佐野 桂市（平成10年度） 相原 聰（平成10年度）
　　　　大橋 育順（平成11年度） 中島 博子（平成11年度）
　・東州津遺跡
　　研究員 島田 豊彰（平成11年度） 妹尾 健司（平成11年度）
　　　　大橋 育順（平成11年度） 中島 博子（平成11年度）
・発掘調査担当
　・西州津遺跡
　　研究員 大橋 育順（平成11年度） 中島 博子（平成11年度）
　・東州津遺跡
　　研究員 島田 豊彰（平成11年度） 妹尾 健司（平成11年度）
　　　　加藤 公夫（平成12年度） 深田 晃司（平成12・13年度）
　　　　井藤 良雄（平成13年度）
　　　　近藤 佳人（平成14年度） 前田 綾博（平成14年度）

調査報告書作成業務

整理普及課長 島巡 賢二
整理係長 豊田大之介

調査報告書作成担当

研究員 大北 和美
整理作業員 石川 幸子 小郷 恵美 笹田加代子 吉田 純代



第1図 西州津遺跡・東州津遺跡位置図



II 遺跡の立地と環境



1 地理的環境

徳島県（旧阿波国）は四国島の東部に位置し、北側では香川県（旧讃岐国）、西側では愛媛県（旧伊予国）、南側では高知県（旧土佐国）と接し、紀伊水道を挟んだ東側では和歌山県（旧紀伊国）と面する。徳島県の総面積は4,144km²であり、四国島の約1/4を占有する。吉野川を代表とする河川流域に平野部が展開するが、総面積の8割を山地が占めるため人々の生活区域は河岸段丘、扇状地を含めても2割ほどにすぎない。

徳島県の地質構造は、県内を東西に走る3つの大きな構造線—鳴門市串浦から愛媛県佐多岬北側に向けて東西に横断する日本有数の断層帯である中央構造線、その南側に分布する御荷鉢構造線、仏像構造線一に大きく影響を受ける。この中央構造線を境として北側の「内帶」、南側の「外帶」とに分けられ、徳島県のはば2/3以上を外帶が占める。外帶には三波川帯、御荷鉢台、秩父帯、四万十帯と呼ばれる地層が北から南へ、内帶には領家帯（和泉層群）が分布する。

河川もこれらの地質構造に影響され、中央構造線に沿って吉野川が、御荷鉢構造線に沿って鮎喰川・勝浦川が、仏像構造線に沿って那賀川が東流し、東方向に開けた形となる。四国最大の河川である吉野川は、愛媛県と高知県との境にある瓶ヶ森山（1,897m）に源を発する。急峻な四国山地を北流し、池山町で90度向きを変え中央構造線に沿いほぼ一直線に東流し、紀伊水道に注ぐ。地形の特徴から総長194kmのうち水源から池田までの約116kmが上流部、池田から岩津までの約38kmが中流部、岩津から河口までの約40kmが下流部とされる⁽¹⁾。

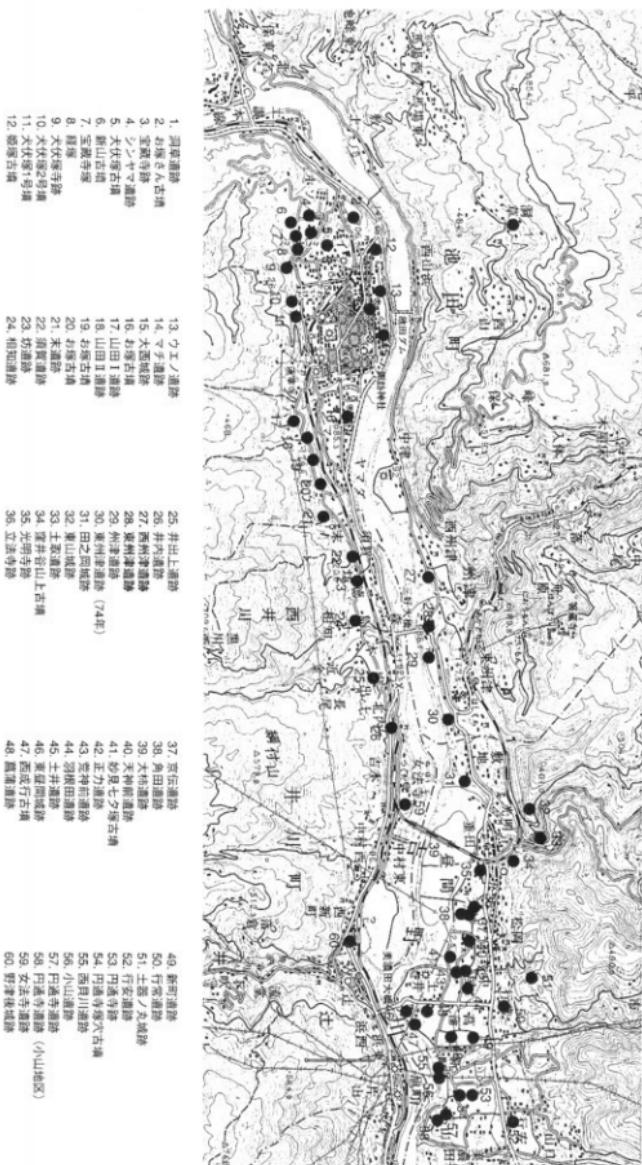
東州津遺跡・西州津遺跡は、徳島県の西北端に位置する三好市池山町に所在する。池田町は香川県・愛媛県に接した地域で、吉野川の上中流部の変換点に位置する。吉野川は高知県にある源流から町境に沿って北流し、町内で流路をかえて中央構造線沿いに東流する。東は東みよし町、西は愛媛県四国中央市、南は同市山城町・西祖谷山村、北では香川県観音寺市にそれぞれ接する。池田町は四国島のはば中央に位置し、古くから四国の十字路として交通の要地であった。

両遺跡は、古吉野川によって形成された標高80~100mの河岸段丘の二段目に形成される。この河岸段丘は鮎苦谷川の剖析を受け、東側の段丘上に東州津遺跡が、西側に西州津遺跡が立地する。この段丘面上では旧石器から弥生時代の遺物の散布が認められ、また低位段面上では弥生時代後期の方形周溝墓が確認された東州津遺跡が立地する。現況は宅地および山畠の造成によって平坦面を形成しているものの、大規模な地形の改変は少ないと考えられる。

2 歴史的環境

現在、旧三好郡内においてその存在が知られている遺跡は250ヶ所以上を数え、四国山地北麓および讃岐山脈南麓の吉野川や古野川の支流によって形成された河岸段丘上および沖積平野上に占地する（第3図）。

旧石器時代の遺跡は主に吉野川北岸の段丘上に分布し、池山町井ノ久保A遺跡・白地峰遺跡・新山A遺跡・洞草遺跡、旧三好町土取遺跡、三野町東上野遺跡、井川町猿渡遺跡、旧三加茂町丹田遺跡があげられる。⁽²⁾これらの遺跡からは、サスカイト製ナイフ形石器、スクレイパー、翼状剥片等が出土している。そのうち土取遺跡では宮田山形ナイフ形石器が、丹田遺跡では国府形ナイフ形石器が出土した。



第2図 西州津遺跡・東州津遺跡周辺の遺跡分布図

縄文時代の遺跡も段丘上に占地する遺跡が主体だが、沖積地にも分布する。これまでに池田町山田遺跡（I）・ウエノ遺跡・旧三好町大柿遺跡・土井遺跡・旧三加茂町加茂谷岩陰遺跡・稻持遺跡・毛田遺跡が確認された。山田遺跡（I）は岩陰遺跡で、縄文上器片・サヌカイト製石鏃・盤状剝片・結晶片岩製叩石等が出土した。出土遺物から、前期に属する可能性がある。大柿遺跡では微高地を中心に河川・柱穴・土坑・たき火跡等が確認された。また晩期の結晶片岩製打製石鏃が大量に出土したことから、この時代に植物の栽培が行われていた可能性が指摘される。加茂谷岩陰遺跡は山田遺跡（I）と同様に岩陰遺跡で、早期の複合山形文土器・橢円形押型文土器・前期の爪形文土器および中期から後期にかけての土器が出土した。あわせて貝殻や獸骨の出土も認められ、季節的なベースキャンプ地として利用されていたと推測できる。稻持遺跡は晩期前半の集落遺跡で、蛇紋岩およびサヌカイト等を用いた石器および石核が住居内から出土しており石器製作集落跡と考えられる。

弥生時代の遺跡は段丘上および沖積地に分布するが、時期によって占地する場所が異なる。弥生時代前期～中期初頭に属する遺跡は、旧三好町大柿遺跡・土井遺跡をあげることができる。これらの遺跡は低位段丘および沖積地上に占地する。

弥生時代中期中葉～後期初頭に属する遺跡として、旧三好町上取遺跡があげられる。この時期の遺跡は、沖積地より低位もしくは中位の段丘上に占地する傾向がうかがえる。土取遺跡は標高約149mを測る丘陵末端部に位置し、南下の水田面との比高差は65mを測る。石器の散布地として知られていたが、調査の結果、直径7.0m程の円形を呈する堅穴式住居が確認され、中期中葉を主体とする壺・甕・鉢、サヌカイト製石鏃・綠泥片岩製環状石斧・管玉・鐵器等の遺物が出土した。高地性集落としての位置付けがなされている。

弥生時代後期～終末期に属する遺跡として、池田町東津遺跡・ウエノ遺跡・マチ遺跡・井川町相知遺跡・井出土上遺跡・須賀遺跡・旧三好町土取遺跡・足代小原遺跡・昼間荒神前遺跡・昼間天神前遺跡・昼間西貝川遺跡・昼間正力遺跡・昼間京伝遺跡・足代東原遺跡・大柿遺跡・旧三加茂町稻持遺跡等をあげることができる。東津遺跡は、低位河岸段丘に位置する後期前半の遺跡である。確認された方形周溝墓の周溝内から、多量の完形土器が出土している。ウエノ遺跡では住居跡が確認され、中央部に炉を伴う住居内からは壺・甕・高杯・サヌカイト製石鏃の他、讃岐からの搬入品と思われる壺形土器片も出土し、上野台地における弥生時代の集落の成立・変遷を考える上で貴重な遺跡といえる。井出土上遺跡では堅穴住居跡を13軒検出し、そのうちの1軒から翡翠製勾玉1点とともに石鏃と大量のサヌカイト片が出土した。昼間遺跡京伝地区は、標高85m前後の洪積台地の先端に位置する。調査の結果、古代から中世を主体とする遺跡であることが判明したが、後期に属する土器も若干出土している。昼間遺跡荒神前地区は、標高85m前後の扇状地の先端部と吉野川の氾濫原が接する箇所に位置する。調査の結果、直径10m程の円形を呈する堅穴住居が確認され、それに伴う土器と鉄器が出土した。時期は後期である。昼間遺跡西貝川地区は、標高84m前後を測る段丘の緩やかな傾斜面に位置する。出土土器がローリングを受けているために詳細な時期は不明だが、弥生時代の円形周溝墓が確認され、サヌカイト製石鏃や石槍、結晶片岩製石斧等が出土した。昼間遺跡天神前地区は、標高84m前後の扇状地の扇端部に位置する。自然流路から弥生土器が出土しているが、詳細な時期は不明である。足代遺跡円通寺地区は、標高85m前後の河岸段丘上に位置する。調査の結果、直径4.0mほどの円形の堅穴住居や土坑等が確認された。足代東原遺跡は標高83m前後の扇状地上に位置し、同時期の西原遺跡の北東約500mの所に所在する。前方後円形をした積石墓と36基以上の円形の積石墓が検出され、弥生時代後期～庄内式併行段階の集落墓

地であることが確認された。前方後円形状の積石墓は墓群のほぼ中央に位置し、鳴門市大麻町所在の萩原1号墳と同様に突出部が未発達な形態を示す。埋葬施設は調査が行われていないものの縁泥片岩板石が残存することから、組合式箱式石棺の可能性が考えられる。また葬送儀礼に関与したと考えられる土器窓まりのうちの一つから、猪型土製品と猿型土製品が出土した。稲持遺跡から蛇紋岩製勾玉とその未製品、原石、筋砥石、叩石、台石が出土しており、蛇紋岩製勾玉の製作遺跡として捉えられる。

古墳時代の遺跡は調査事例が少なく様相が不明瞭なものが多いが、池田町シマ古墳、井川町須賀古墳、旧三好町足代東原遺跡・妙見七夕塚古墳・伊月古墳・西成行古墳・大柿遺跡・土井遺跡、旧三加茂町丹田古墳・天神塚古墳等が知られている。丹山古墳は現在県西部で唯一確認されている古墳時代前期の前方後円墳で、全長35mを測る。合掌型竪穴式石室をもち、石室から獸形鏡・鉄劍・袋状鉄斧・刀子等が出土した。大柿遺跡では竪穴住居280余軒・掘立柱建物40余棟・鍛冶「房等が良好な状態で検出され、古墳時代後期の大規模な集落跡であるとともに、当該期の集落構造を検討する上で重要な資料である。

古代の遺跡は調査事例が少ないものの、井川町相知遺跡・井出上遺跡、旧三好町大柿遺跡、三野町加茂宮遺跡、旧三加茂町末石遺跡・中庄東遺跡をあげることができる。相知遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物が確認され、石帯の出土および遺跡の立地条件から官衙的性格を持つ遺跡として捉えられる。井出上遺跡でも平安末～鎌倉時代の掘立柱建物が確認された。大柿遺跡では平安時代の七師器焼成土坑・掘立柱建物・水田等が検出された。また掘立柱建物を構成する柱穴から完形の白磁四耳壺・瓦質四耳壺等が確認され、建物廃絶とともにうらかの祭祀行為と考えられる。加茂野宮遺跡では「吉」字銅印や菊花楓双鳥文鏡が出土し、官衙的性格を持つ可能性がある。中庄東遺跡は、条里遺構と推定される範囲の東側に位置する。奈良・平安～室町時代にかけての遺跡であり、8世紀代の土器とともに帶金具や和同開珎が出土し、近隣に官衙的な施設の存在を推定される。また条理遺構が検出され、吉野川下流域の国衙周辺で認められるN-10°-Wとは異なる方向をとることが確認された。

中世の遺跡は、段丘および沖積地上に分布する。池田町山田遺跡(Ⅱ)・お塚古墳・供養地遺跡・和田遺跡・馬路遺跡・井川町八幡遺跡・坊遺跡・旧三好町大柿遺跡・上井遺跡・円通寺遺跡・東原遺跡・三加茂町中庄東遺跡等があげられる。文献⁽³⁾によると旧三好郡内には中世城郭が多く存在し、山城町には田尾城、池田町には馬路城・大西城・大利城、川崎城・佐野城・漆川城・州津城・中西城・白地城、井川町には野津後城、旧三好町には足代城・山ノ岡城・東山城・東畠間城、三野町には屋形山城・清水城・加茂野宮城・芝生城、旧三加茂町には金丸城・鶴城が所在する。また旧三好郡内には莊園・郷・保が存在し、主なものとして寛治四(1090)年に成立した京都賀茂別雷社領の権田庄・元京都蓮華王院(三十三間堂)領で鎌倉中期には山城醍醐寺領となった金丸庄(旧三加茂町)、西園寺領であり現在の池田町から旧三好町畠間付近を庄城とする田井庄・文治元(1185)年に源頼朝によって山城石清水八幡宮に寄進された一野田保(旧三好町)、南北朝時に祖山一族の兵糧料所として預け置かれていた井川庄(井川町)・稻用保(旧三加茂町)・三好郷などがあげられる。また金丸庄にかかる金丸東庄・金丸西庄(旧三加茂町)も存在した。

主な集落遺跡として大柿遺跡・上井遺跡・東原遺跡・中庄東遺跡・戸館跡として円通寺遺跡・集石墓が確認された山田遺跡(Ⅱ)・お塚古墳・供養地遺跡・馬路遺跡をあげることができる。

円通寺遺跡では方形区画溝に囲まれた屋敷地とその外側に堀と土塁の一部、および多数の炭窯を確認した。屋敷地内では、四面庇を持つ二×五間の建物と15棟以上の掘立柱建物、屋敷地の東北隅において火葬墓等を検出した。この屋敷地は13世紀半ばから形成され、15世紀後半～16世紀前半には堀・土塁を

構築するなどの大規模な拡張工事を行い、城館の呼称にふさわしい外観となる。古文書等から調査地が三野田保の比定地であり、三野田保の莊官あるいは地頭クラスの居館であった可能性がある。また炭窯は、黒川原谷川流域の開発に伴い木炭生産が行われた可能性がある。また二野町では、香川県十瓶山窯製品に類似した須恵器壺などを生産した花園窯が所在する。

近世の三好郡は、讃岐・伊予・土佐のそれぞれの国に接する交通の要衝であった。吉野川北岸を撫養街道、南岸を伊予街道が通り、大西町（現池田町）で両街道は合流する。讃岐へ向かう主要な峠路として著越え（猪ノ鼻峠）があった。他にも主な峠として、二軒茶屋、東（男山）峠、櫻の休場、貞鈴峠があげられる。土佐へは二つの道があり、伊予街道から分岐して山城谷を経由する道と井内谷（現井川町）を経由する祖谷街道と呼ばれる道がある。これらの通行人を取り締まるために、現在の池田町には池田陣屋・白地船渡番所・佐野口番所・佐野口御分一所が置かれていた。また三好郡内の産業として、煙草・漆・葛粉・炭・紙等が有名である。

（注）

- (1) 奥村清他1998『自然の歴史シリーズ④徳島「自然の歴史」』コロナ社
- (2) 早瀬隆人1992『巨石遺跡の立地についての一視点—吉野川北岸域を中心として—』徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真朱』創刊号
- (3) 湛浅良幸他1979『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』新人物往来社

参考文献

- 『土取遺跡調査報告』徳島県教育委員会 三好郡三好町教育委員会 1973
『豊間遺跡発掘調査概報—吉野川北岸農業水利事業に伴う緊急発掘調査—』京伝地区 荒神前地区 1976
徳島県教育委員会 三好町教育委員会 吉野川北岸農業水利事務所
『吉野川北岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 豊間遺跡（天神前地区）』1977
『徳島県文化財調査概報』徳島県教育委員会 1977
『徳島県文化財調査概報 昭和53年度』徳島県教育委員会 1978
久田公洋1997『加茂宮遺跡—四国電力株式会社三野変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
徳島県三好郡三野町埋蔵文化財発掘調査報告書 三野町教育委員会
石尾和仁1998『ウエノ遺跡一池田警察庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第22集 徳島県埋蔵文化財センター
森浩一・松藤和人1999『徳島県三好郡三加茂町所在 加茂谷岩陰遺跡群』同志社大学文学部考古学調査 報告書第10冊 同志社大学文学部文化学科
天羽利夫・岡山真知子 1985『徳島の歴史散歩』徳島市民叢書・19 徳島市立図書館
菅原康夫 1988『日本の古代遺跡37 徳島』保育社
三好町史編集委員会 1996『三好町史 地域誌民俗編』徳島県三好郡三好町
三好町史編集委員会 1997『三好町史 歴史編』徳島県三好郡三好町
『三好郡』『徳島県の地名』日本歴史地名体系37 2000 平凡社
『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.7 1995年度』1996 (財)徳島県埋蔵文化財センター
『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.8 1996年度』1997 (財)徳島県埋蔵文化財センター
『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.9 1997年度』1998 (財)徳島県埋蔵文化財センター
『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.10 1998年度』1999 (財)徳島県埋蔵文化財センター
菅原康夫 41 徳島県足代東原遺跡』『日本考古学年報 35』1982年度版 日本考古学協会



III 西州津遺跡



1 調査の経過

(1) 調査の経過

試掘 一次 平成10年9月16日～平成10年10月6日

試掘 二次 平成11年4月6日～平成11年4月30日

本調査 平成11年4月6日～平成12年3月15日

西州津遺跡は、調査対象地の用地取得状況等から試掘調査は2回に分けて行われることになり、試掘一次調査は平成10年9月16日～10月6日の18日間に、試掘二次調査は平成11年4月6日～4月30日の16日間にそれぞれ実施した。試掘二次調査は、本調査と併行して行っている。重機掘削によるトレンチ掘りで、試掘一次調査では対象面積6,300m²につき620m²を、試掘二次調査では150m²の調査を行った。

試掘一次調査では、調査対象地のやや西より部分（本調査での6・10・11・12区、2・8区の一部にあたる）が用地買収未完了であることから、主に東側を中心に試掘を行った。その結果、一部の調査区で黒褐色を呈した包含層を確認し、遺構面と考えられるにぶい黄褐色の自然堆積層をほぼ全面で確認した。しかし吉野川に近い低位段丘一段目では、包含層ならびに遺構面を確認することはできなかった。

試掘二次調査は残りの区域で調査を行い、試掘一次調査で確認された中世の遺構面の拡がりを把握するのに務めた。その結果、調査対象地のうち6,080m²を本調査対象地として絞り込み、そのまま本調査に移行し、1班で調査にあたることとなった。

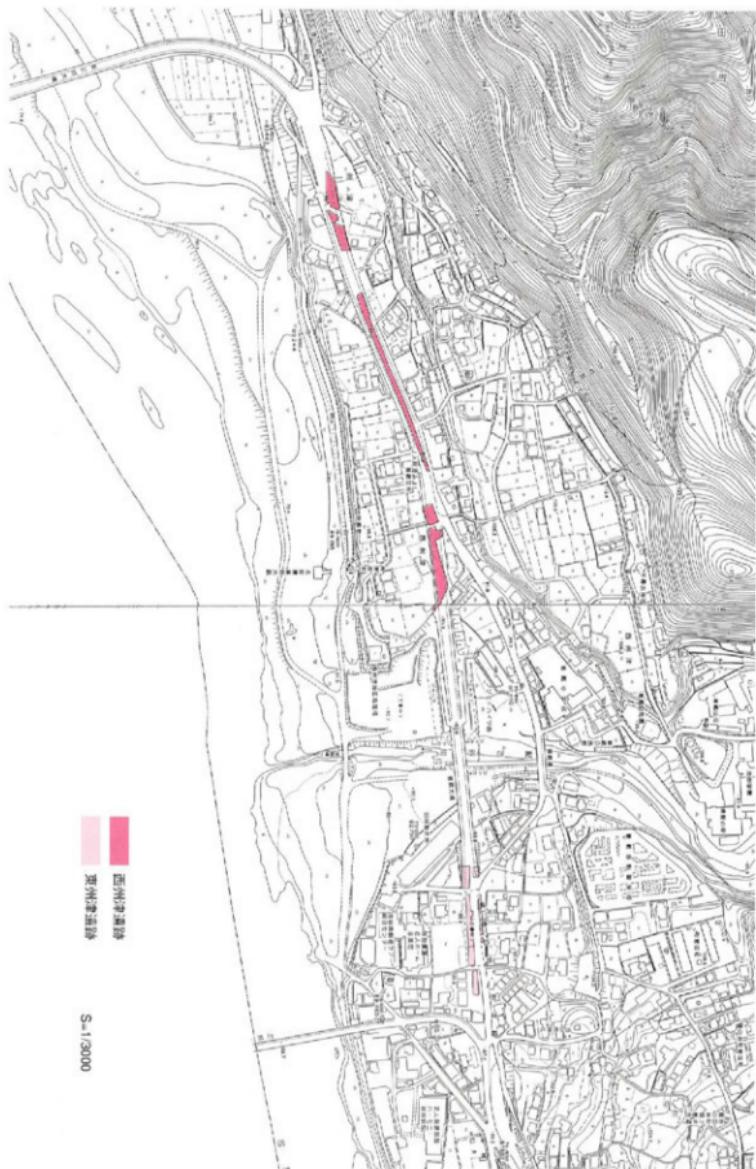
本調査は平成11年4月6日から始まり、平成12年3月15日に終了した。発掘調査面積は、6,080m²を数える（第3図）。また平成12（1999）年2月5日には、検出した掘立柱建物や土塙築を中心現地説明会を開催し、県内外から約250名の参加者が集まり盛会となった。

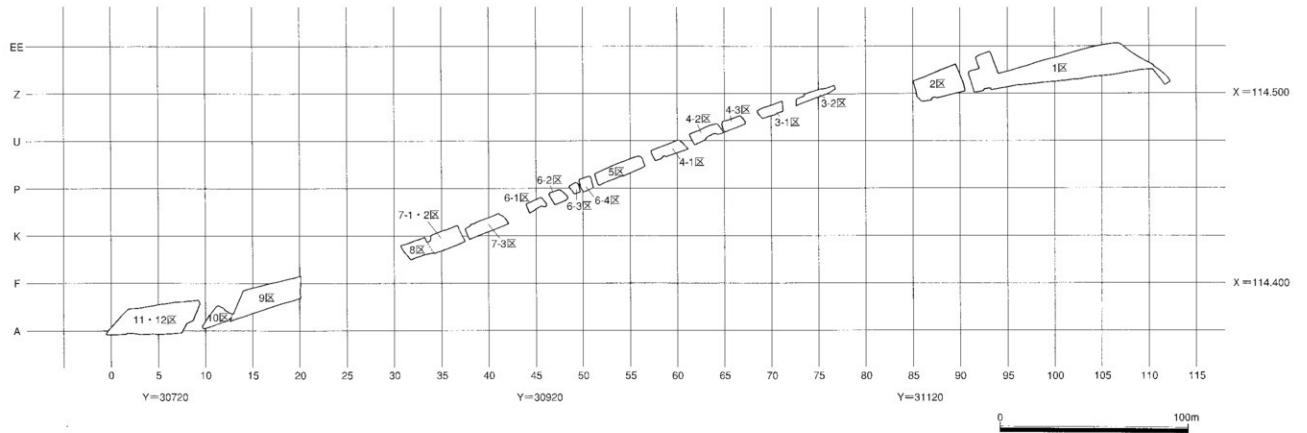
(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたり、グリッドの配置を発掘調査統一基準にならい次のように設定した。第IV系国土地標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込み、南西隅を基準として北にA、B、C……、東に1、2、3……の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表している（第4図）。

調査対象地が広範囲にわたるため、調査区の設定はその間を横切る道路や用水路などの保守の必要性があるもの、および地形を考慮した上で、便宜上山畠・宅地などの現地割りのまとまりごとに東から第1～12調査区とした。

遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後に遺構の確實性が乏しいと判断されたものは欠番とした。これは遺構記号・番号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最低限にとどめた。遺構番号はそれぞれ通りで付与されているものの、整理の段階で遺構記号の変更に伴い、すべての遺構に対して遺構番号を新たに振り直すこととした。





第4図 西州津遺跡 グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

4月6日	調査準備・試掘調査開始。	8月10日	7-3区機械掘削開始。
4月30日	引つ越し・調査準備・試掘調査終了。	8月17日	7-3区人力掘削開始。
5月10日	11・12区機械掘削開始。	8月25日	7-3区造構掘削開始。
5月11日	12区機械掘削終了。	8月31日	7-3区写真撮影。
5月14日	11区機械掘削終了。	9月6日	6-4区機械掘削開始。
5月17日	11・12区機械掘削完了検査。	9月7日	6-2区機械掘削開始。
5月18日	12区人力掘削開始。	9月8日	7区埋め戻し。
5月19日	9区機械掘削開始。	9月9日	6-2区人力掘削。
5月25日	12区人力掘削・9区機械掘削終了。	9月10日	6-2区造構掘削・6-4区人力掘削開始、4区機械掘削開始。
5月26日	11区人力掘削開始。	9月27日	4-1区人力掘削開始。
5月31日	11区人力掘削終了・造構検出。	9月28日	6-4区埋め戻し。
6月1日	11・12区造構検出。	9月29日	3-1区機械掘削開始。
6月2日	9区人力掘削開始。	9月30日	4-1区造構掘削開始。
6月3日	11区造構掘削開始。	10月4日	3-1区人力掘削開始、4-2区機械掘削開始、6-2区埋め戻し。
6月8日	9区人力掘削終了・造構検出。	10月12日	3-1区造構掘削開始。
6月10日	11・12区造構掘削。	10月15日	4-2区人力掘削開始。6-1区機械掘削開始。
6月14日	9区造構掘削開始。	10月18日	6-1区人力掘削開始。6-3区機械掘削開始。
6月18日	9区路面作成。	10月19日	6-1区造構掘削開始。
6月20日	9区機械掘削開始。	10月20日	6-3区人力掘削開始。3-2区機械掘削開始。
7月1日	9・11・12区空操。	10月21日	6-3区造構掘削開始。
7月6日	9・10・11区完了検査。8区機械掘削開始。	10月26日	6-1・6-3区埋め戻し、4-2区造構掘削開始。
7月8日	8区機械掘削終了。10区機械掘削開始。	10月28日	3-2区人力掘削開始。
7月9日	10区機械掘削完了。	10月29日	6-1区埋め戻し。
7月12日	10区人力掘削・造構検出。	11月2日	3-2区造構掘削開始。4-1区確認トレンチ。
7月14日	10区造構掘削開始。	11月5日	2区(北半分)機械掘削開始。
7月15日	10区造構掘削・8区人力掘削。	11月9日	2区(北半分)人力掘削開始。
7月16日	10区造構掘削・8区造構検出・掘削。	11月10日	4-3区機械掘削開始。
7月21日	8区、10区写真撮影。	11月16日	4-3区人力掘削開始。5区機械掘削開始。
7月22日	7-1区機械掘削開始。		
7月26日	7-1区造構検出・掘削開始。		
8月2日	7-1区調査終了・埋め戻し。		
8月3日	7-2区機械掘削開始。		
8月5日	7-2区人力掘削・造構検出・造構掘削。		

- 11月17日 3-2区埋め戻し。4-3区遣構掘削開始。
- 11月19日 5区人力掘削開始。4-3区埋め戻し。



写真1 作業風景

- 11月20日 5区遣構掘削開始。
- 11月27日 2区（北半分）遣構掘削開始。
- 11月30日 5区埋め戻し。
- 12月3日 2区（南半分）機械掘削開始。
- 12月5日 2区（南半分）人力掘削開始。
- 12月6日 1区（東側）機械掘削開始。
- 12月7日 2区（南半分）遣構掘削開始。
- 12月15日 1区（東側）人力掘削開始。



写真2 積雪状況

- 12月16日 2区（南半分）写真撮影。
- 12月21日 1区（東側）遣構掘削開始。
- 12月24日 2区（南半分）埋め戻し完了。

1999年

- 1月10日 1区（西側）機械掘削開始。
- 1月11日 1区（西側）人力掘削開始。
- 1月13日 1区（西側）遣構掘削開始。
- 2月5日 現地説明会。
- 2月10日 1区（西側）埋め戻し。
- 2月17日 1区トレンチ掘削。
- 2月22日 1区埋め戻し。
- 3月15日 調査終了。

2 調査成果

1. 基本層序

本遺跡は前述の通り、標高95~100m前後を測る河岸段丘上に位置する。調査対象地は、南に向かつて緩やかに傾斜する平地である。調査区はこの段丘上を東西に横断するような形で設定され、東端の1区から西端の12・11区まで総延長距離はほぼ570mとなる。調査の結果、遺跡のやや中央を北東および北西方向から南西方向に向かって南流する旧自然流路と、その東西に微高地が拡がる旧地形を確認した。

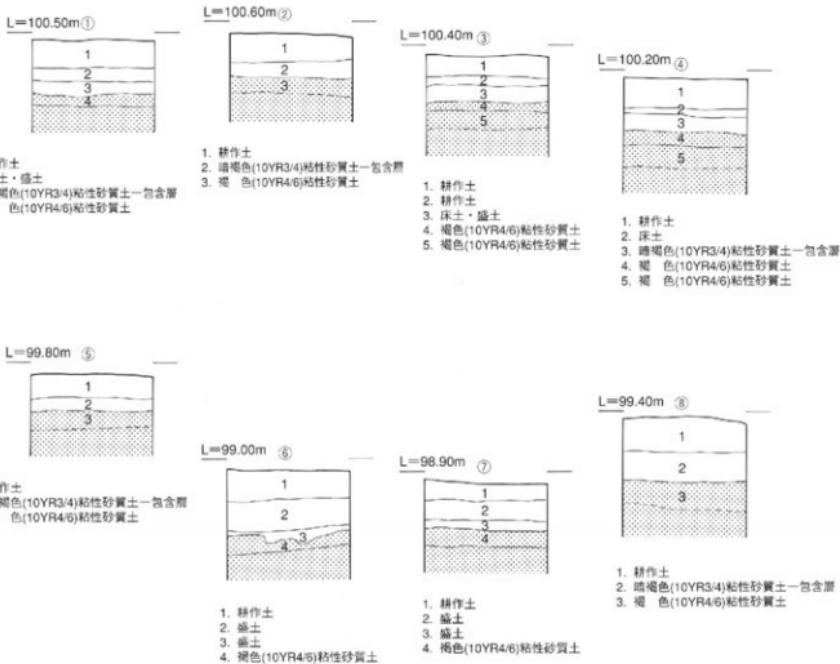
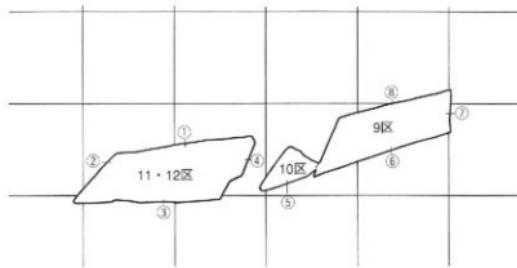
各調査区は現在の池田町州津および西州津の集落内にあり、調査前は宅地もしくは田畠である。旧自然流路近辺では緩やかに低くなる地形を牛かして水田として、微高地上では宅地もしくは田畠として土地利用されている。土地の利用状況に伴い、削平もしくは盛土などの土地改変が行われ、各調査区ごとに包含層および遺構の残存状況は異なる。また調査範囲が東西方向に長く、調査地点が異なれば上層堆積にも相違点が認められる。調査区はこの自然流路上と微高地上に大きく大別することができ、土層堆積もこれに従い大要2種を示す。

調査対象地内において現地表面の最も高い地点は、西側微高地上に位置する12・11区であり、標高約100.50mを測る。また12・11区は、調査対象地の一番西端にあたる。東側微高地上では3~2区が最も高く、標高約97.20mを測る。一番低い地点は調査対象地の東端に位置する1区で、標高約96.0mを測る。

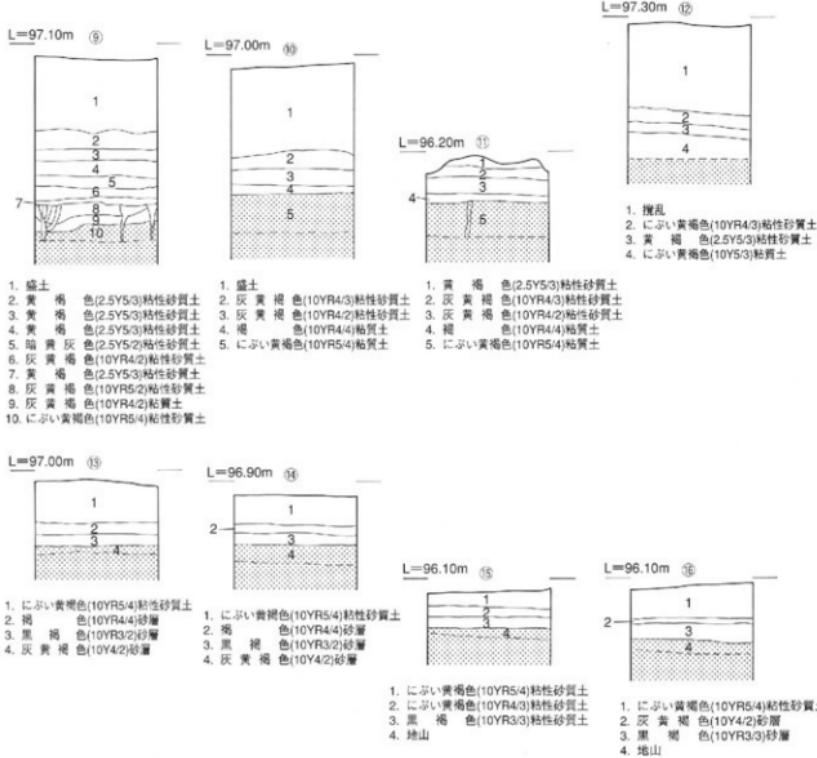
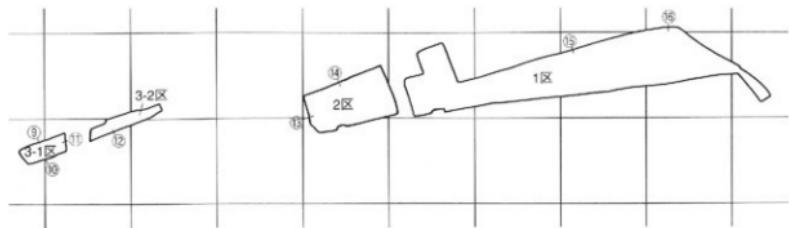
本遺跡の土層堆積の観察は、基本的に各調査区の四壁について行った。しかし各調査区によって土層断面の記録方法は異なり、全面記録もしくは東西または南北の任意の壁での記録にとどめている調査区もある。報告にあたっては、これらの記録から各調査区での平均的な土層堆積をもとに柱状模式図を作成し、各調査区ごとの基本層序について述べる（第5・6図）。しかし、3区から8区にかけて広範囲に水田が検出されていることから、これらの調査区の土層堆積に関しては次章の水田の項目で述べることにする（第26・27図）。

旧自然流路をはさんで西側微高地上にある調査区（9~12区）は、現況は田畠である。土層堆積に若干相違点があるものの、この4つの調査区では概ね耕作土・床土・盛土・暗褐色の包含層・自然堆積層という層序となる。9区は部分的に削平を受けているため、北側でのみ包含層が確認された。また包含層を除去すると、弥生時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の掘立柱建物・堅穴住居・土坑・土壙墓・柱穴・不明遺構が確認された褐色粘性砂質土の自然堆積層が拡がり、遺構面となる。遺構の大半が、中世に属する。

東側微高地上にある調査区（1~3区）は、現況は宅地および田畠である。1・2区の基本層序はほぼ同じで、若干相違点があるものの耕作土・床土・盛土・遺構面である自然堆積層となる。包含層が検出されなかつたことから、宅地造成や耕作により削平を受けたと考えられる。3区は調査地点によって若干上層堆積が異なり、微高地上では搅乱土・現耕作土・床土・盛土・自然堆積層となる。3~1区の南壁では、2・3層で土器片が少量認められる。自然流路上では、搅乱上と流路内堆積土の間に旧水田面と床土が互層をなし、低い地形を利用して水田経営を行ってきたことがわかる。遺構面とした自然堆積層は1・2区では灰黄褐色、3区ではにぶい黄褐色を呈する。ここでは、弥生時代・鎌倉時代・室町時代の掘立柱建物・土坑・土壙墓・柱穴・不明遺構を検出したが、そのほとんどが中世に属する。



第5図 西州津遺跡基本土層図(1)



0 1m

第6図 西州津遺跡基本土層図(2)

2. 遺構と遺物

平成11（1999）年度に行われた調査で確認した遺構の配置については、第7・8・24・25図に示すとおりである。調査区は駒苦谷川西側の河岸段丘上の平坦面に拡がり、遺構密度に違いはあるものの全調査区において遺構・遺物を確認した。宅地造成に伴う削平を受けるものの、前述のように部分的に包含層が残存する。

今回の調査で確認された遺構・遺物の所属時期は、縄文時代晚期・弥生時代中期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代と時代幅が広い。しかし検出構造は多いものの、図化可能な遺物の出土量は少ない。

遺構数は、掘立柱建物13棟、竪穴住居1棟、溝3条、水田状遺構、土坑169基、柱穴1160基、自然流路9条、土壙墓90基、集石遺構1基、不明遺構36基を確認した。各時代の遺構は同一遺構面上で確認され、調査対象地は中世を主体とする。

掘立柱建物

掘立柱建物1号（SA1001）（第9図）

12・11区 A・B-5・6で確認された8基の柱穴で構成される掘立柱建物。EP4はSP1137と切り合ひ関係にあるが、前後関係は不明である。EP8は、ST1026の掘り下げ後に確認できた。この掘立柱建物は、当遺跡で確認された建物の中で一番西端に位置する。

建物の規模は梁間1間（2.9m）、桁行3間（6.63m）、床面積44.54m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は、平均すると梁間2.85m、桁行2.2mとなる。棟方向はN-10°-Eに向く。柱穴掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径は36~60cm、最大深度38~60cmを測る。柱痕は、8基のうちEP1~3・EP5・6の5基で確認できた。

小片のために図化出来なかったものの、EP1の掘り方内部から底部回転ヘラ切りの土師質土器杯・擂鉢・礫上が、EP3から鉄釘・壁土が、EP4から器壁が薄手で白色を呈する土師質土器杯・煮沸具片・羽釜脚部・須恵質土器碗・白磁片が、EP5から根石と考えられる被熱した結晶片岩が、EP6から壁土が、EP8から土師質土器碗・鍋・羽釜・擂鉢・鉄塊・土錘・壁土・弥生土器がそれぞれ出土した。

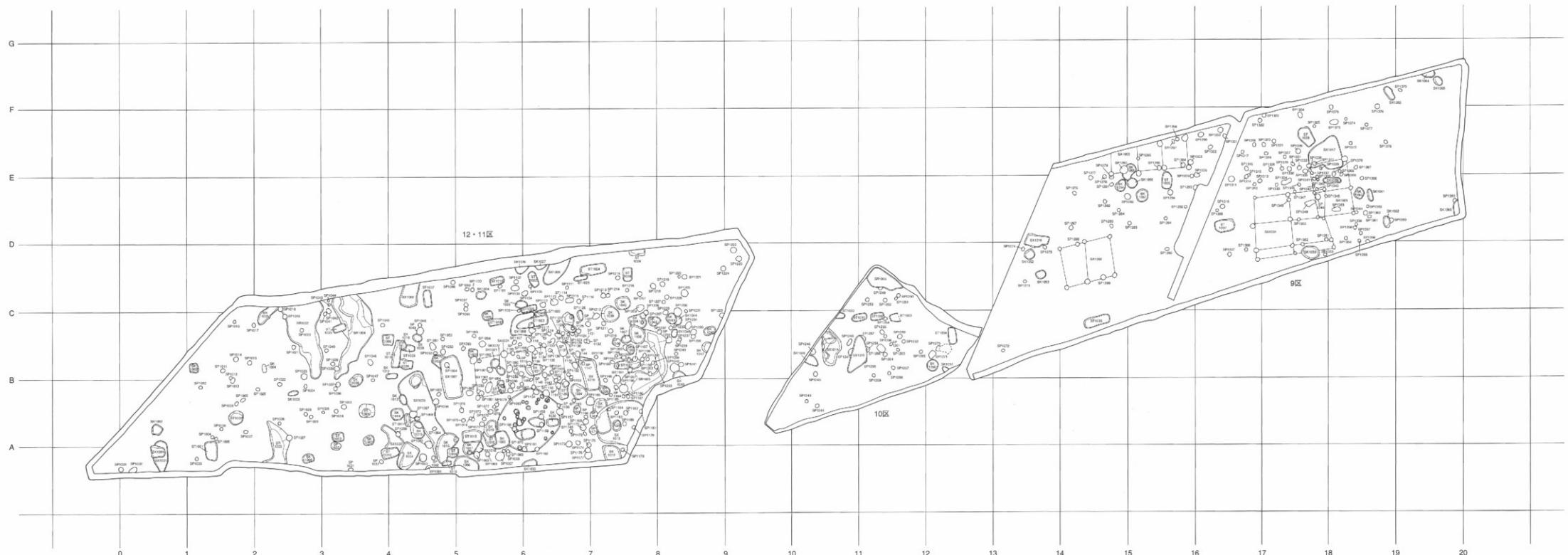
本遺構の所属時期は、EP4から出土した薄手の白色土師質土器杯の存在から15・16世紀の可能性も考えられるが、EP4の遺構の切り合い関係が不明瞭であり、また他の柱穴から出土している遺物の内容を考えてみると13~14世紀の可能性が高いと思われる。

掘立柱建物2号（SA1002）（第9図）

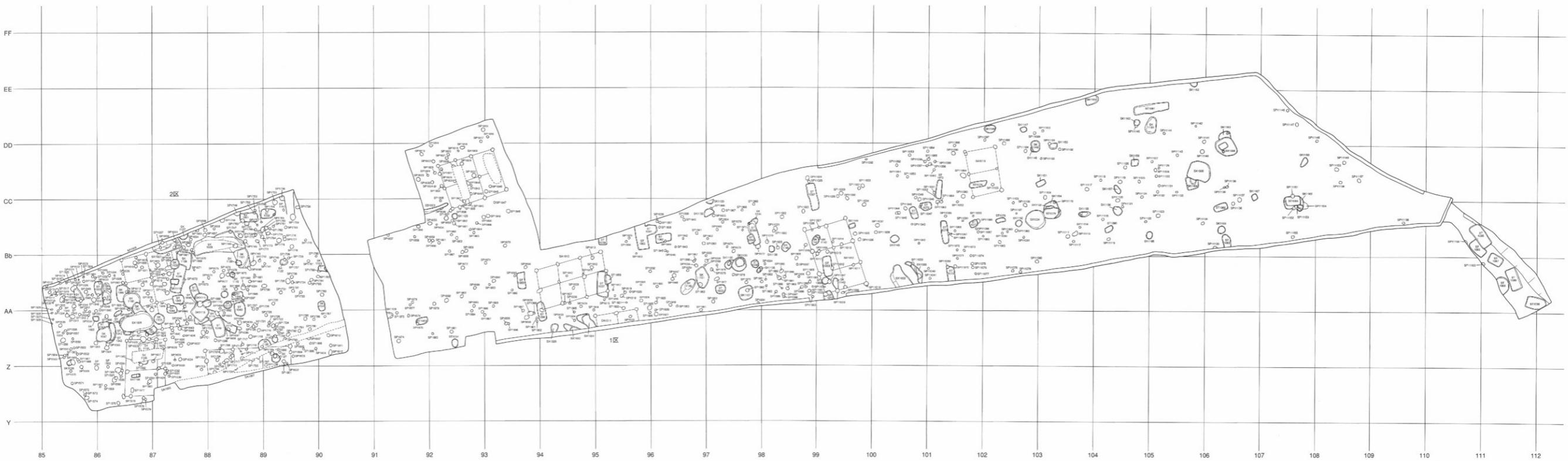
9区 C・D-13・14で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。建物の規模は梁間1間（2.96m）、桁行2間（3.90m）、床面積10.77m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間2.93m、桁行1.88mを測り、棟方向はN-15°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径は30~40cm、深度14~34cmを測る。柱痕は、EP1・4・5で確認できた。

EP3の柱穴掘り方内部から土師質土器碗・皿・こね鉢が出土し、こね鉢（1）のみ図化できた。またEP5から、小片のために図化できなかったものの土師質土器杯が出土している。

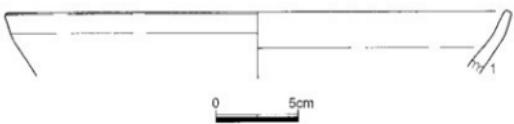
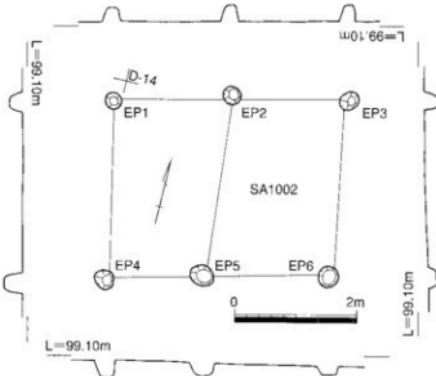
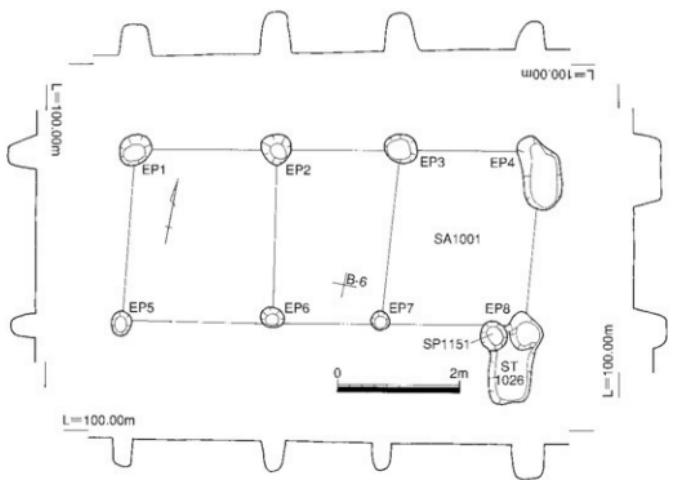
本遺構の所属時期は、出土遺物から12~14世紀と考えられる。



第7図 西州津遺跡9~12区遺構配図



第8図 西洲津遺跡1・2区造構配置図



第9図 SA1001・1002遺構図・出土遺物

掘立柱建物3号（SA1003）（第10図）

9区 D・E-14・15で調査区北側溝に切られた状態で確認された掘立柱建物。調査区外に拡がるため構成する柱穴数は不明だが、調査区内で検出できたのは6基を数える。

建物の規模は不明だが、東西方向に桁行を持つと仮定した場合、桁行3間（5.80m）で、平面形態は長方形と推測できる。また、柱間寸法の平均は梁間2.05m、桁行1.93mを測り、棟方向はN-5°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは方形を呈し、径は30~50cm、深度20~24cmを測る。柱痕は、6基のうちEP1のみで確認できた。

小片のために図化できなかったものの、EP1の柱穴掘り方内部から土師質土器杯・煮沸具片が、EP2から土師質土器杯・小皿・煮沸具片、黒色土器椀、須恵質土器椀、焼土塊が、EP4では土師質土器椀、須恵質土器椀、結晶片岩、砂岩が、EP5から土師質土器片が、EP6から土師質土器杯、須恵質土器壺が出土した。

本遺構の所属時期は、12~13世紀と推測される。

掘立柱建物4号（SA1004）（第10図）

9区 C・D-16~18で確認された12基の柱穴で構成される庇付き掘立柱建物。庇は、南側に設けられる。建物の規模は梁間2間（3.90m）、桁行2間（5.70m）、床面積23.94m²、庇部は梁間1間（0.60m）、桁行2間（2.80m）を測り、平面形態はやや歪な正方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間1.48m、桁行2.75mを測り、棟方向はN-5°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径は20~35cm、深度6~42cmを測る。柱痕は、12基のうちEP1、EP7~9、EP12の5基で確認できた。

小片のために図化できなかったものの、EP2の柱穴掘り方内部から底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯が、EP5の掘り方内部から土師質土器煮沸具片が、EP9の掘り方内部から上師質土器片、須恵質土器椀が出土した。

本遺構の所属時期は、出土遺物から12~13世紀と推測される。

掘立柱建物5号（SA1005）（第11図）

9区 D・E-17・18で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。建物の規模は梁間2間（2.76m）、桁行1間（4.08m）、床面積11.01m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間2.72m、桁行2.01mを測り、棟方向はN-10°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径は20~34cm、深度8~36cmを測る。柱痕は、6基のうちEP3・4で確認できた。

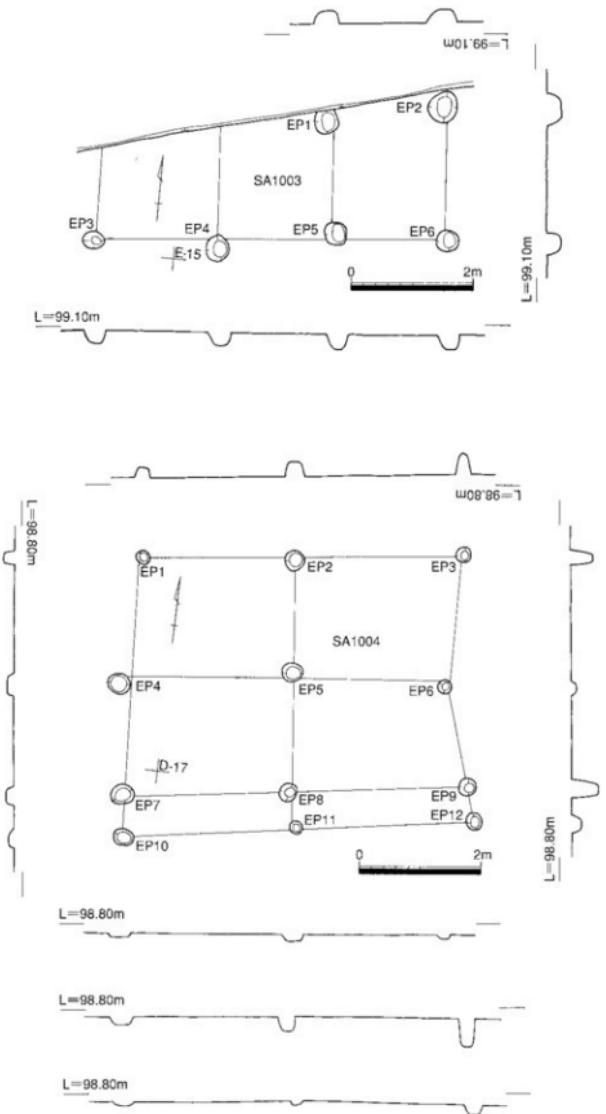
小片のために図化できなかったものの、EP4の柱穴掘り方内部から底部静止糸切りを施す上師質土器杯が出土した。

本遺構の所属時期は、出土遺物から13世紀以降と推測される。

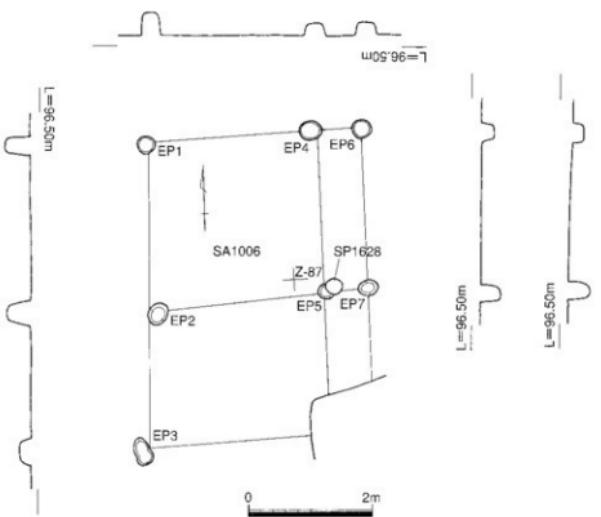
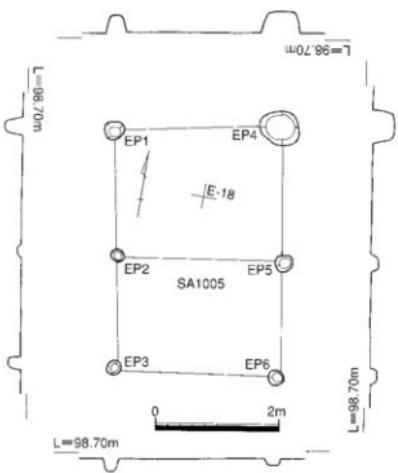
掘立柱建物6号（SA1006）（第11図）

2区 Y・Z-86・87で確認された7基の柱穴で構成される庇付き掘立柱建物。本来は9基の柱穴で構成されたと思われるが、残り2基の柱穴は調査区外に延びる。庇は、東側に設けられる。またEP5はSP1628に切られた状態で確認された。

建物の規模は梁間2間（5.02m）、桁行1間（2.76m）、推定床面積18.04m²、庇部は梁間1間（0.75



第10図 SA1003・1004構造図



第11図 SA1005・1006構造図

m)、桁行2間（2.60m）を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は、梁間1.75m、桁行2.57mを測り、棟方向はN-1°-Wである。柱穴掘り方は円形もしくは橢円形を呈し、径は26~45cm、深度16~42cmを測る。柱痕は、7基すべてに確認できた。

遺物の出土が認められないために本造構の所属時期を特定することは困難だが、周辺の掘立柱建物と同時代の造構と推測される。

掘立柱建物7号（SA1007）（第12図）

2区 Y-Z-87~89で南側溝および搅乱に切られた状態で確認された掘立柱建物。調査区外に拡がるため構成する柱穴数は不明だが、調査区内で検出できたのは6基を数える。

建物の規模は不明だが、東西方向に桁行を持つと仮定した場合、桁行3間（7.73m）で、平面形態は長方形と推測できる。また、柱間寸法の平均は梁間2.00m、桁行2.55mを測り、棟方向はN-1°-Eに向く。柱穴掘り方は円形を呈し、径は20~35cm、深度14~60cmを測る。柱痕は、検出できたすべての柱穴で確認できた。

小片のために図化できなかったものの、EP2の柱穴掘り方内部から弥生土器片が出土した。この土器片は混入物と考えられ、この建物の所属時期は中世と推測される。

掘立柱建物8号（SA1008）（第12図）

2区 Z-AA-86・87でSK-ST-SXそれぞれ2基に切られた状態で確認された掘立柱建物。9基の柱穴で構成されるが、本来は12基で構成されたと思われる。

建物の規模は梁間3間（6.90m）、桁行2間（4.46m）、推定床面積31.18m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は、梁間2.28m、桁行2.25mを測り、棟方向はN-12°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは橢円形を呈し、径は26~34cm、深度12~28cmを測る。柱痕は、EP6・9の2基を除いた7基で確認できた。

小片のために図化できなかったものの、EP5の柱穴掘り方内部から土師質土器羽釜と考えられる土器片が出土した。遺物の出土数は少ないが、この建物の所属時期は中世と推測される。

掘立柱建物9号（SA1009）（第13図）

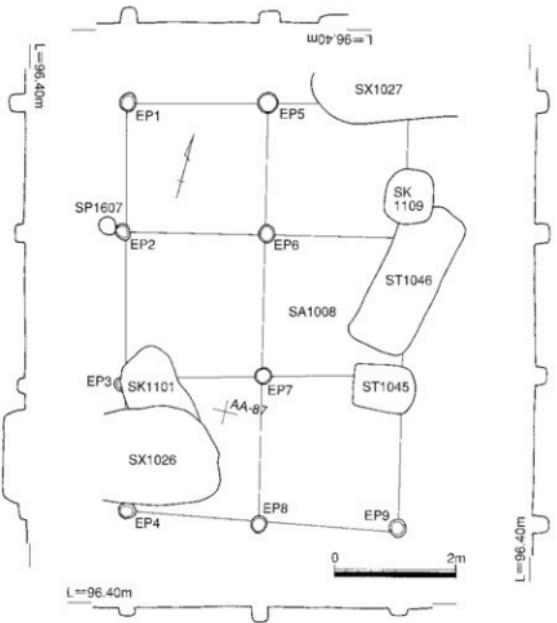
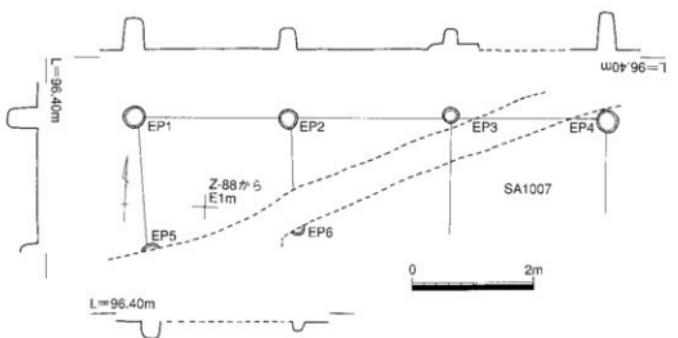
1区 BB-CC-92・93で搅乱に切られた状態で確認された掘立柱建物。9基の柱穴で構成されるが、11基で構成された可能性が考えられる。

建物の規模は梁間2間（4.16m）、桁行3間（5.20m）、床面積20.90m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間2.36m、桁行1.73mを測り、棟方向はN-18°-Eに向く。柱穴掘り方は円形を呈し、径は25~35cm、深度4~24cmを測る。柱痕は、EP2を除く8基で確認できた。

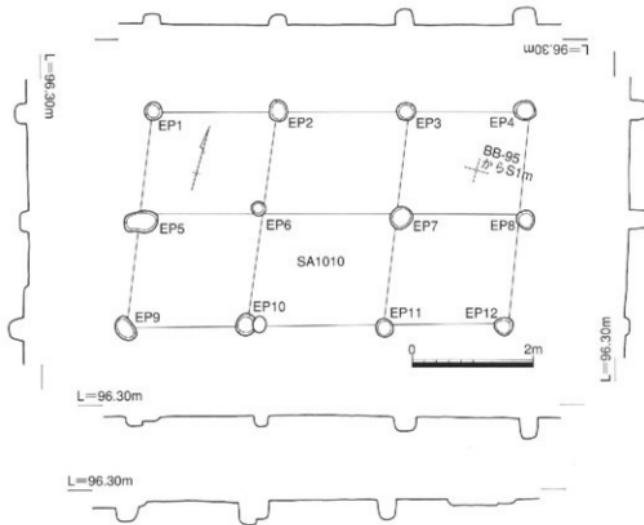
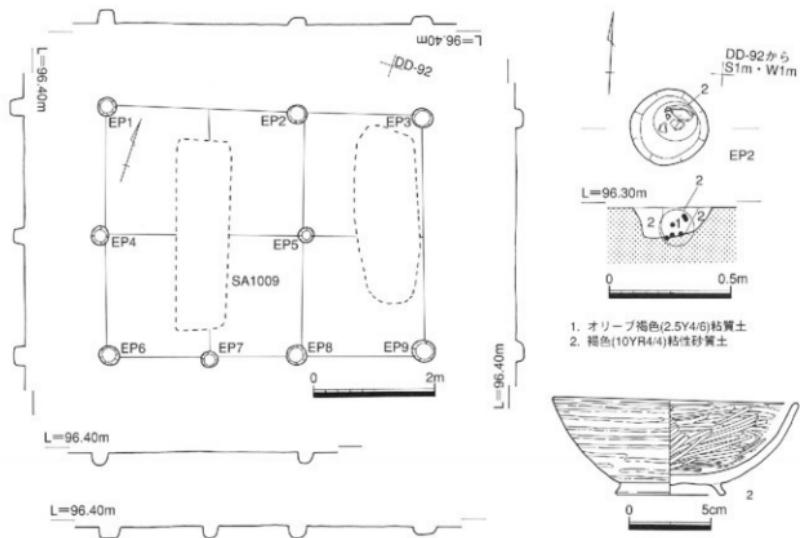
遺物は、EP3の柱穴掘り方内部から黒色土器碗が、EP8から土師質土器こね鉢と考えられる土器片が出土した。その中で図化できたのは、内面のみ炭素吸着している黒色土器碗（2）である。本造構の所属時期は、出土遺物から12世紀と推測される。

掘立柱建物10号（SA1010）（第13図）

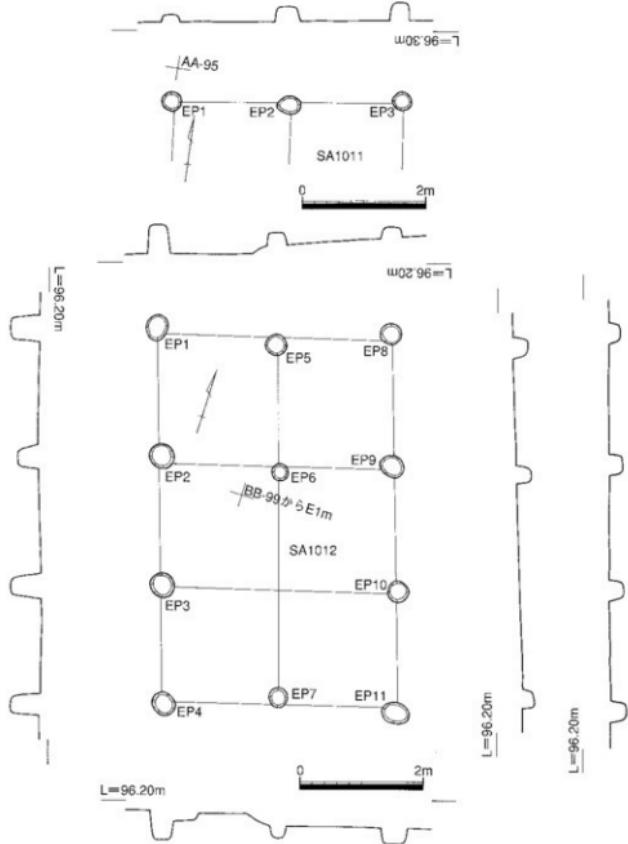
1区 Z-BB-93~95で確認された12基の柱穴で構成される掘立柱建物。建物の規模は梁間2間（3.60



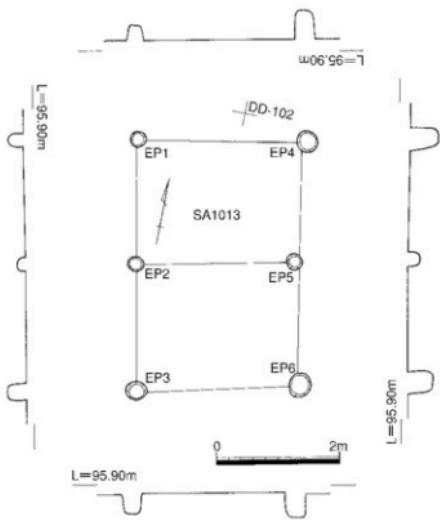
第12図 SA1007・1008構造図



第13図 SA1009・1010遺構図・出土遺物



第14図 SA1011・1012構造図



第15図 SA1013遺構図

m)、桁行3間(6.22m)、床面積21.63m²を測り、平面形態はややいびつな長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間1.79m、桁行2.08mを測り、棟方向はN-15°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは梢円形を呈し、径は25~55cm、深度8~38cmを測る。柱痕は、EP5・12を除く10基の柱穴で確認できた。

柱穴掘り方内部から遺物が出土していないために本遺構の所属時期を特定することは困難だが、周囲の掘立柱建物の配置から12~13世紀の可能性が考えられる。

掘立柱建物11号（SA1011）（第14図）

1区 Z・AA-94・95で南側溝に切られた状態で確認された掘立柱建物。調査区外に拡がるため構成する柱穴数は不明だが、調査区内で検出できたのは3基を数える。

建物の規模は不明だが、東西方向に桁行を持つと仮定した場合、桁行2間(3.80m)で、平面形態は長方形と推測できる。また、柱間寸法の平均は桁行1.23mを測り、棟方向はN-4°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは梢円形を呈し、径は30~40cm、深度12~28cmを測る。柱痕は、EP1を除く2基の柱穴で確認できた。

柱穴掘り方内部から遺物が出土していないために本遺構の所属時期を特定することは困難だが、周囲の掘立柱建物の配置から考えて中世の遺構と推測される。

掘立柱建物12号（SA1012）（第14図）

1区 AA・BB-98・99で確認された11基の柱穴で構成される掘立柱建物。建物の規模は梁間3間

(6.20m)、桁行2間(3.83m)、床面積23.24m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間1.92m、桁行2.31mを測り、棟方向はN-17°-Eに向く。柱穴掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径は25~45cm、深度16~50cmを測る。柱痕は、11基すべてに確認できた。

小片のために図化できなかったものの、EP4の柱穴掘り方内部から土師質土器片、黒色土器碗、鉄滓、弥生土器片、結晶片岩が、EP7から土師質土器杯が、EP9から土師質七器こね鉢が、EP11から土師質土器煮沸具片、土師質焰烙と考えられる土器片が出土した。

本造構の所属時期は、出土遺物から12~13世紀と考えられる。

掘立柱建物13号 (SA1013) (第15図)

1区 CC-101・102で確認された6基の柱穴で構成される掘立柱建物。建物の規模は梁間2間(4.12m)、桁1間(2.76m)、床面積10.81m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法の平均は梁間2.65m、桁行2.01mを測り、棟方向はN-11°-Eに向く。柱穴掘り方は円形を呈し、径は24~40cm、深度16~48cmを測る。柱痕は、EP5基をのぞく5基の柱穴で確認できた。

柱穴掘り方内部から遺物が出土していないために本造構の所属時期を特定することは困難だが、周囲の掘立柱建物の配置から考えて中世の造構と推測される。

竪穴住居

竪穴住居1号 (SB1001) (第16~22図)

位置・構造

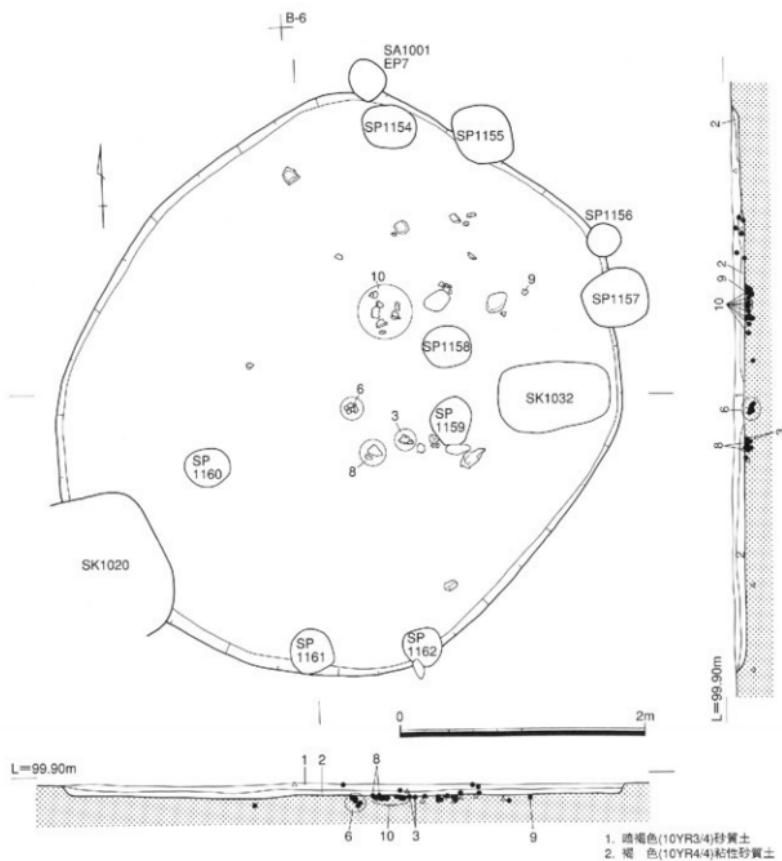
12・11区 A-5・6で柱穴10基・土坑2基に切られた状態で確認された竪穴住居。この住居の平面形態・底面形態はともに不整な円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸9.52m、短軸9.36m、最大深度0.10m、床面積16.34m²を測る。

覆土除去後、床面に柱穴19基、土坑1基、火1基を検出したが、周壁溝ならびに他の施設の確認は出来なかった。また多数の柱穴を検出したものの、主柱穴を特定するには至らなかった。しかし、EP1・9・16・17の4基が主柱穴の可能性が考えられ、円形ないしは多角形と推測される。

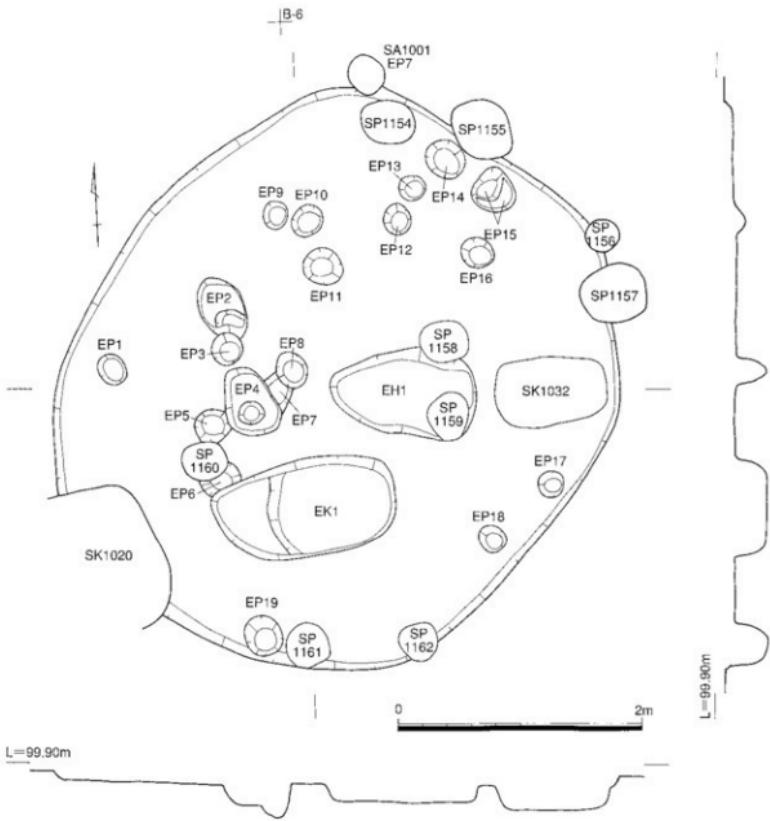
柱穴・土坑 (第18図)

検出した柱穴19基は、直径0.21~0.58mの円形あるいは楕円形で、最大深度0.04~0.65mを測る。主要上色は暗褐色を呈し、19基のうちEP8・9・11・16の4基で柱痕を確認した。また、EP2から弥生土器片が出土したが、小片のために図化できなかった。

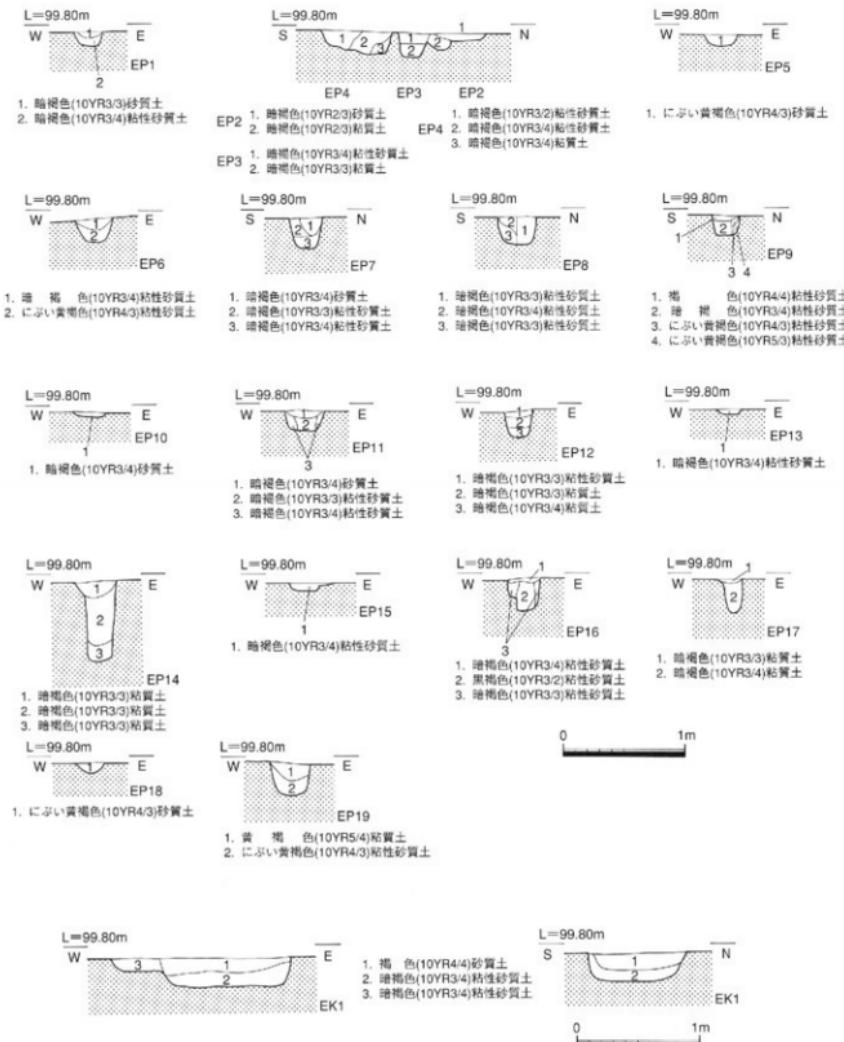
土坑は、住居内で1基検出できた。EK1の平面形態・底面形態はともにやや不整な楕円形、断面形態は不整形を呈し、長軸1.46m、短軸0.80m、最大深度0.24mを測る。覆土は3層に分層できるものの、概ね暗褐色を呈する。1層は褐色砂質土、2・3層は暗褐色粘性砂質土で、1・2層中に地山ブロックをやや多く混入する。また2層の下位から、土器が出土した。遺物は弥生土器壺・体部片、サヌカイト剥片が出土したが、小片のために図化できなかった。



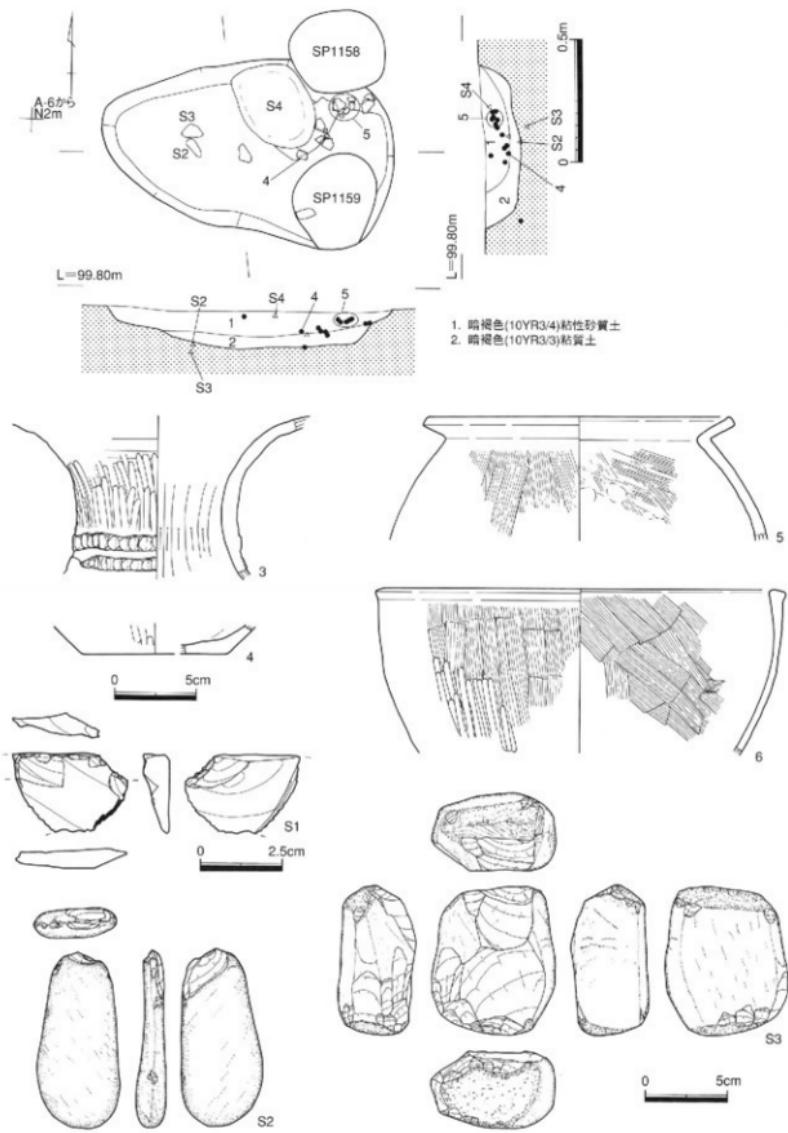
第16図 SB1001遺物出土状況図



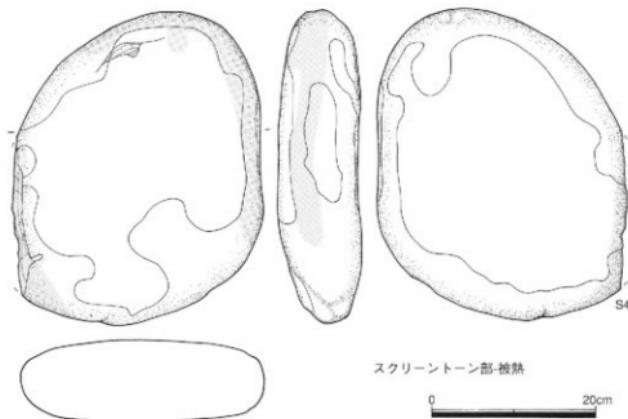
第17図 SB1001遺構図



第18図 SB1001EP・EK 断面図



第19図 SB1001EH 遺構図・出土遺物



第20図 SB1001EH 出土遺物

土層

覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色砂質土、2層は褐色粘性砂質土で地山ブロックをやや多く混入する。遺物は、床面直上からの出土が多い。

炉（第19・20図）

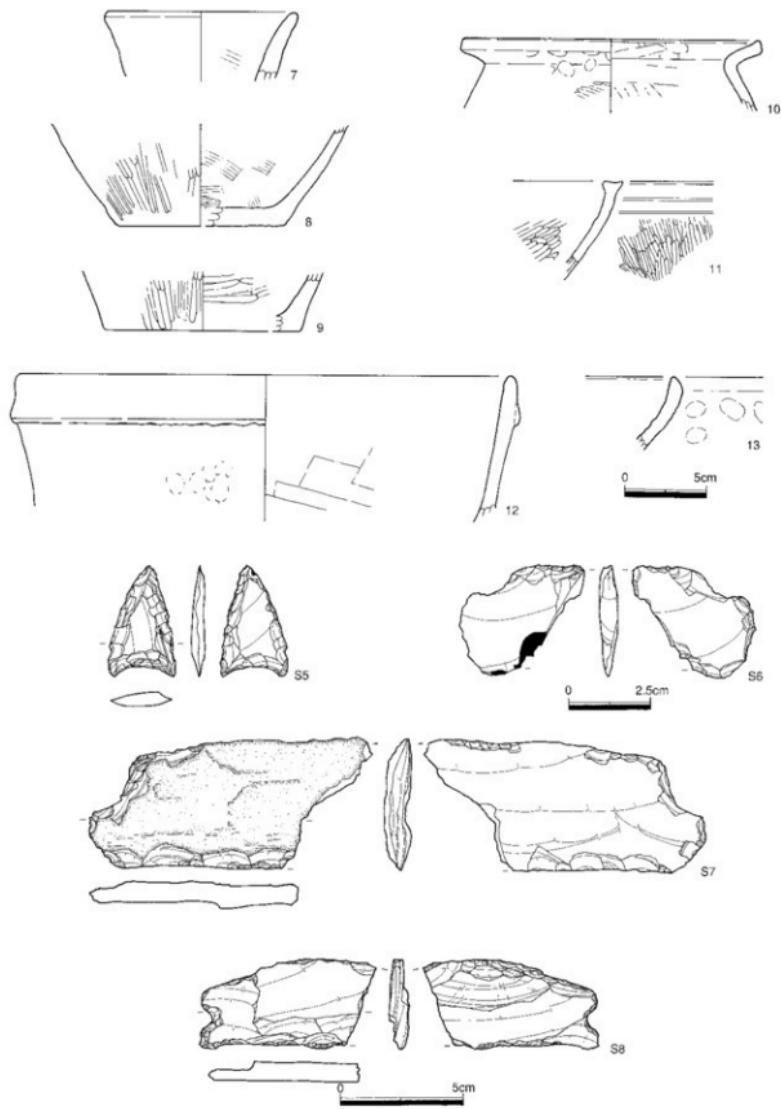
平面形態・底面形態とともにやや不整な梢円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.21m、短軸0.71m、最大深度0.15mを測る。底面は、部分的に段差が認められる。覆土は暗褐色を呈し、含有物の違いから2層に分層できる。1層から遺物が多く出土し、2層は地山ブロックをやや多く混入する。

遺物は弥生土器壺（4）、甕（5）、サヌカイト剥片（S1）、結晶片岩敲石（S2・S3）、砂岩製磨石（S4）が出土した。S4は表面の側縁部を中心に、被熱痕が認められる。また3・6は炉出土ではなく、住居内の出土遺物である。

出土遺物（第19・21・22図）

完形品の出土が認められなかったが、弥生土器壺・甕・高坏・高坏脚部・鉢、土師質土器杯・羽釜・片口捕鉢、須恵質土器小皿、須恵質土器片、サヌカイト製石礫・楔形石器・剥片、結晶片岩製石庖丁、砂岩製敲石が出土し、同化可能な遺物はそのうちの13点である。

壺（3・7～9）は、口縁部がやや外反気味に立ち上がる口縁部（7）と底部（8・9）である。3は、頸部に指頭圧痕突帯を2条巡らせる。8は内面ハケメを、9は横位のミガキを施す。甕（10）はくの字口縁を呈し、内面体部はケズリのち板ナデを施す。このとき頸部は、板ナデによって平坦面をなす。また外面部から体部にかけて、炭化物の付着が認められる。高坏（11）は、凹線2条を施す。鉢（6）は、胎土に金雲母を含む。土師質土器羽釜（12）・こね鉢（13）は、混入物である。



第21図 SB1001出土遺物(1)



第22図 SB1001出土遺物(2)

石鎌（S5）は、凹基式の完形品である。楔形石器（S6）は右側縁部が欠損するものの、打面構成は4方向と推測できる。打製石庖丁（S7・S8）は2点共に右側縁部が欠損し、平刃・单刃を持つ。S9は完形の敲石で、6面全面に敲打痕が認められる。また、表面に磨面が認められる。

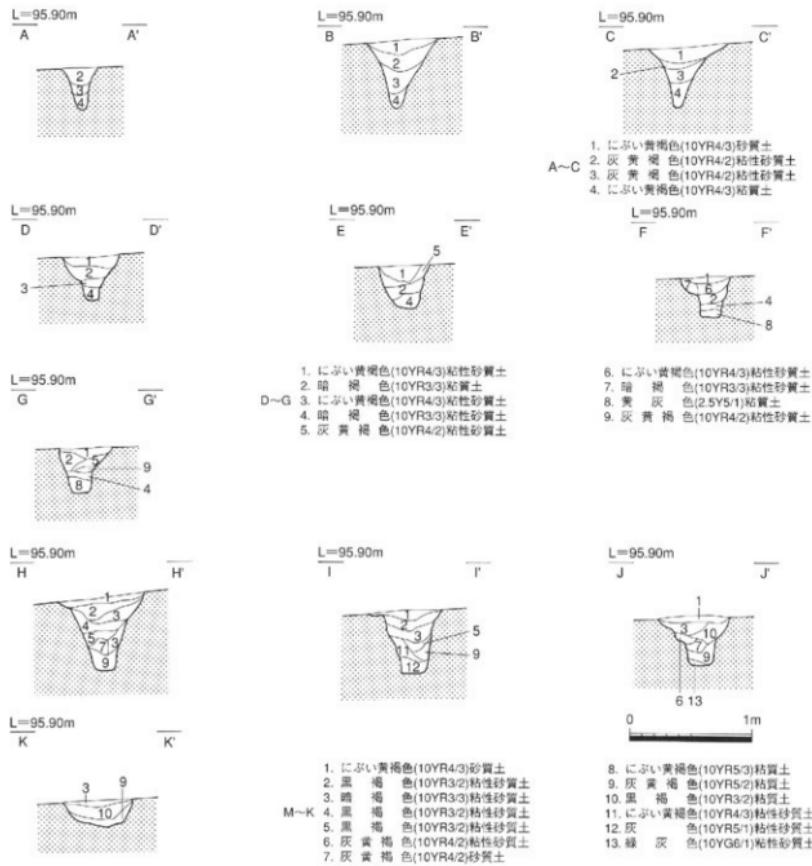
時期 住居内および炉からの遺物の出土状況から、この住居の時期は弥生時代中期後葉以降と思われる

溝

溝1号（SD1001）（第23・24図）

7-1・2、8区 H~K-31~36で確認された溝。7-3区でも溝は検出できるかと思われたが、溝の東端は北東方向に、西端は8区の南西方向にさらに延びるものと思われる。断面形態は場所によって若干異なるものの、ほぼV字形を呈し、調査区内での全長30.30m、最大幅0.50m、最大深度0.60mを測る。溝の深度は東側ほど深くなることから、SR1007に向かって東流した可能性が考えられる。覆土の堆積は場所によって異なるものの、1層がにぶい黄褐色を呈するのは共通する。またBCベルトで、2層と3層の境から弥生土器片が出土した。D~Gベルト間の5層には、にぶい黄褐色土ブロックを混入する。

遺物は、タタキを施す弥生土器片と縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。また遺構の検出状況から、溝は7-2区の水田部分より後出すると思われ、また水田は出土遺物より中世段階のものと考えられることから、溝の時期は中世以降と推測できる。



第23図 SD1001断面図

水田

水田（SI1001）（第24～27図）

7-2区～3-1区 J-Y-35～71にかけて確認された水田。擾乱や削平を受けた調査区も認められるが、各調査区の現況は水田である。この水田が検出された調査区は旧自然流路上、あるいは流路に隣接する場所に位置する。周辺と比較して標高のやや低い場所にあり、流路が埋没した後に水田が構築されたものと推測できる。各調査区の土層堆積状況は、概ね擾乱、現耕作土、盛土、旧水田・床土・盛土との互層、黒色ないしは褐灰色の流路内堆積土となる。場所によって旧水田面数は異なるが、連続と水田として土地利用されてきたことがわかる。

各調査区の土層堆積については、西側の8区から説明を行う。8区は西側微高地上に位置し、現況は田畠である。同じ西側微高地上にある9～12区とは、東へ50m程離れた場所に位置する。調査区の約西半分が削平を受けるものの、褐色を呈する自然堆積層上に溝・土坑・柱穴を確認した。9区の南壁での造構面の高さは98.50m、8区の南壁では95.60mを測り、比高差2.90mとなる。

7区も同じく西側微高地上に位置し、部分的に擾乱を受けるものの現況は田畠である。黄褐色を呈する自然堆積層上で、7-1・2区では溝・土坑・水田・柱穴を、7-3区では自然流路を確認した。水田は溝の南側で確認でき、稲株痕と鷄跡を検出している。土層は旧水田と床土・盛土との互層の下に、灰黄褐色の包含層と黒褐色の流路内堆積土が認められる。7区は他の調査区と異なり、黒褐色土上で稲株痕や遺構を検出している。

7-3区では他の調査区で確認した水田を検出していないが、水田を検出した黒色土の堆積が認められることから、存在した可能性は強いと思われる。7-3区の造構面の高さが調査区内で一番低く、約94.90mを測る。

6区は、35m程の範囲の中で調査区が4分割される。現況は田畠で、土坑・水田・柱穴・自然流路・不明遺構を検出した。6区の土層堆積は、7区と同様である。6区では旧耕作土が明瞭に確認でき、6-2区では現在のも含めて水田層が4面確認できる。6-1区北壁で確認した6～8層は流路内堆積土、その他の壁面で確認した造構面直上の層は水田土壤と思われる。調査区全面に水田が拡がり、稲株・鷄跡痕を検出した同一面で土坑・柱穴・不明遺構を確認した。

5区の現況は田畠で、土坑・水田・自然流路・柱穴を検出した。調査区北側でSR1008の南肩を検出し、その南側に水田が拡がる。おそらく4区と同様に、SR1008上にも水田が存在したと思われる。北壁・東壁では、流路内堆積土の黒褐色土が認められる。また、稲株・鷄跡痕を検出した同一面で土坑・柱穴を確認した。

4区は、50m程の範囲の中で調査区が3分割される。現況は田畠で、土坑・水田・自然流路・柱穴・不明遺構を検出した。調査区全面に水田が拡がり、自然流路上でも確認した。また他の調査区と比較して、植物の根の痕跡が顕著に認められる。稲株・鷄跡痕を検出した同一面で、土坑・柱穴・不明遺構を確認した。

3区は、40m程の範囲の中で調査区が2分割される。現況は田畠で、溝・土坑・水田・自然流路・柱穴・集石遺構を検出した。3-1区は調査区西側が擾乱を受けるものの、自然流路の範囲内で水田を確認し、稲株痕を検出した。3-2区は東側微高地上に位置し、調査区内で南北方向に流れるSR1009の東肩を検出した。同一面で土坑・柱穴・集石遺構・不明遺構を確認した。

東西400mの範囲で水田を確認し、稻株と跡と考えられる痕跡を多數検出したが畔は確認できなかった。跡は、真北に対してN-58°-EからN-81°-Eに傾くものと、真北に並行して走る二方向のものが認められた。また、自然流路および遠構面直上の層から出土した遺物は、概ね中世を主体とする。

土坑

土坑19号（SK1019）（第28図）

12・11区 A-5でST1016を切った状態で確認された土坑。平面形態・底面形態とともにやや不整な楕円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、長軸1.26m、短軸0.96m、最大深度0.28mを測る。覆土は4層に分層できるものの、概ね暗褐色を呈する。4層は、地山ブロックを多く混入する。また3・4層の下層を中心に、土師質土器擂鉢（14）と直径20cm前後の砂岩が出土している。

遺物は土師質土器杯・擂鉢、須恵質土器壺、焼土塊、弥生土器片鉢？、被熱した砂岩が出土し、そのうち固化できたのは、内面下位に使用痕跡が認められる土師質土器擂鉢（14）のみである。また14は、ST1016から出土した破片と接合した。

土坑28号（SK1028）（第28図）

12・11区 C-5・6でST1021に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態とともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.90m、短軸0.55m、最大深度0.22mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層は暗褐色粘性砂質土である。また2層は、地山ブロックをやや多く混入する。

遺物は須恵器片、土師質土器鍋が出土し、固化できたのは土師質土器鍋（15）のみである。鍋の胎土には、金雲母が含まれる。

土坑30号（SK1030）（第29図）

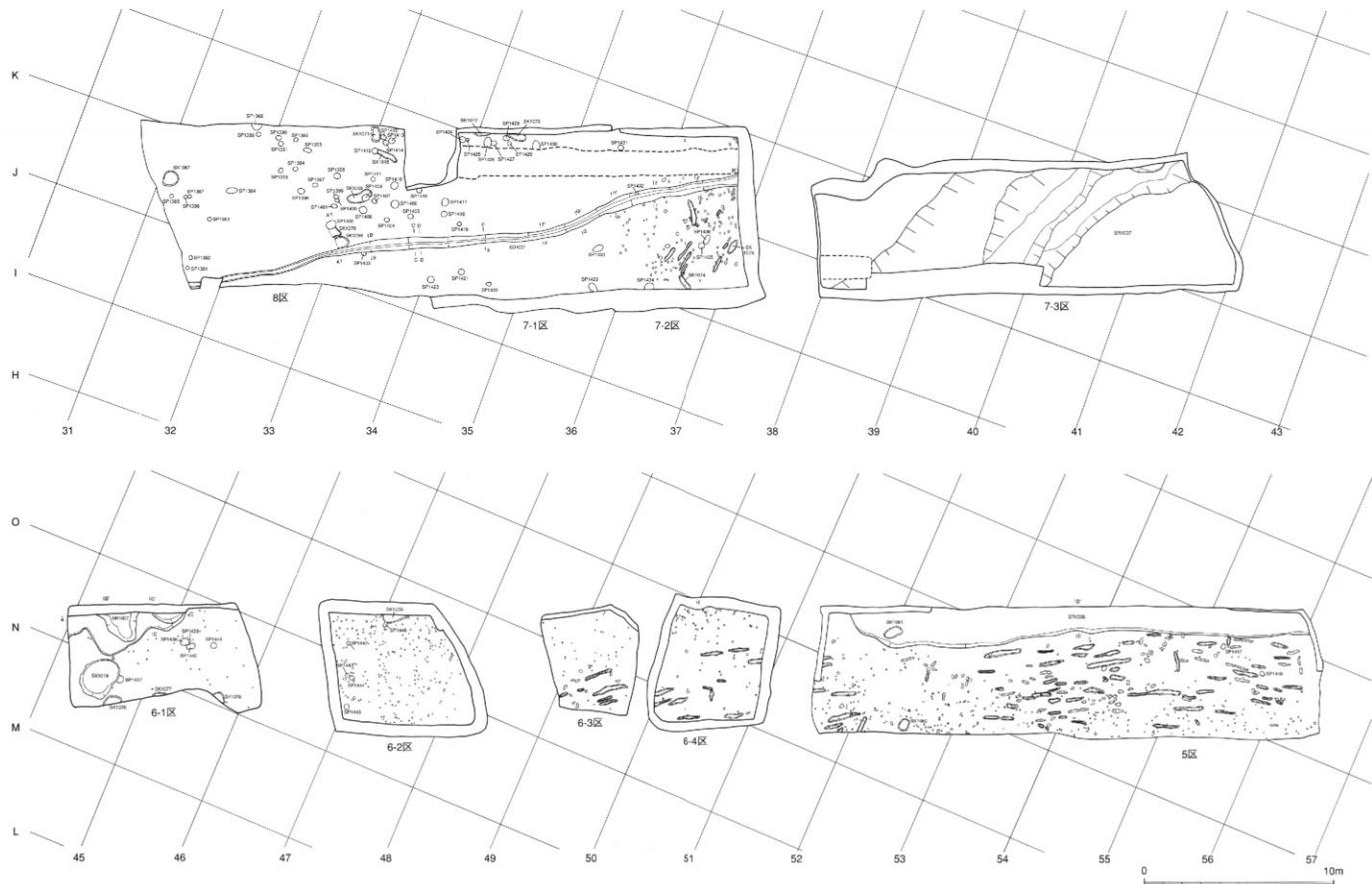
12・11区 B-6で確認された土坑。平面形態・底面形態とともに楕円形、断面形態は不整形を呈し、東側で段を形成する。長軸0.94m、短軸0.54m、最大深度0.22mを測る。覆土は3層で、1層はにぶい黄褐色砂質土、2層は暗褐色粘性砂質土、3層は褐色粘性砂質土である。全体的に地山ブロックをそれぞれ混入するが、3層中に多く認められる。

遺物は土師質土器片・煮沸具片、不明鉄製品が出土し、固化できたのは不明鉄製品（16）のみである。16は左右非対称なマチをもち、柄の部分が断面方形、刃と考えられる部分が断面や長方形を呈する。

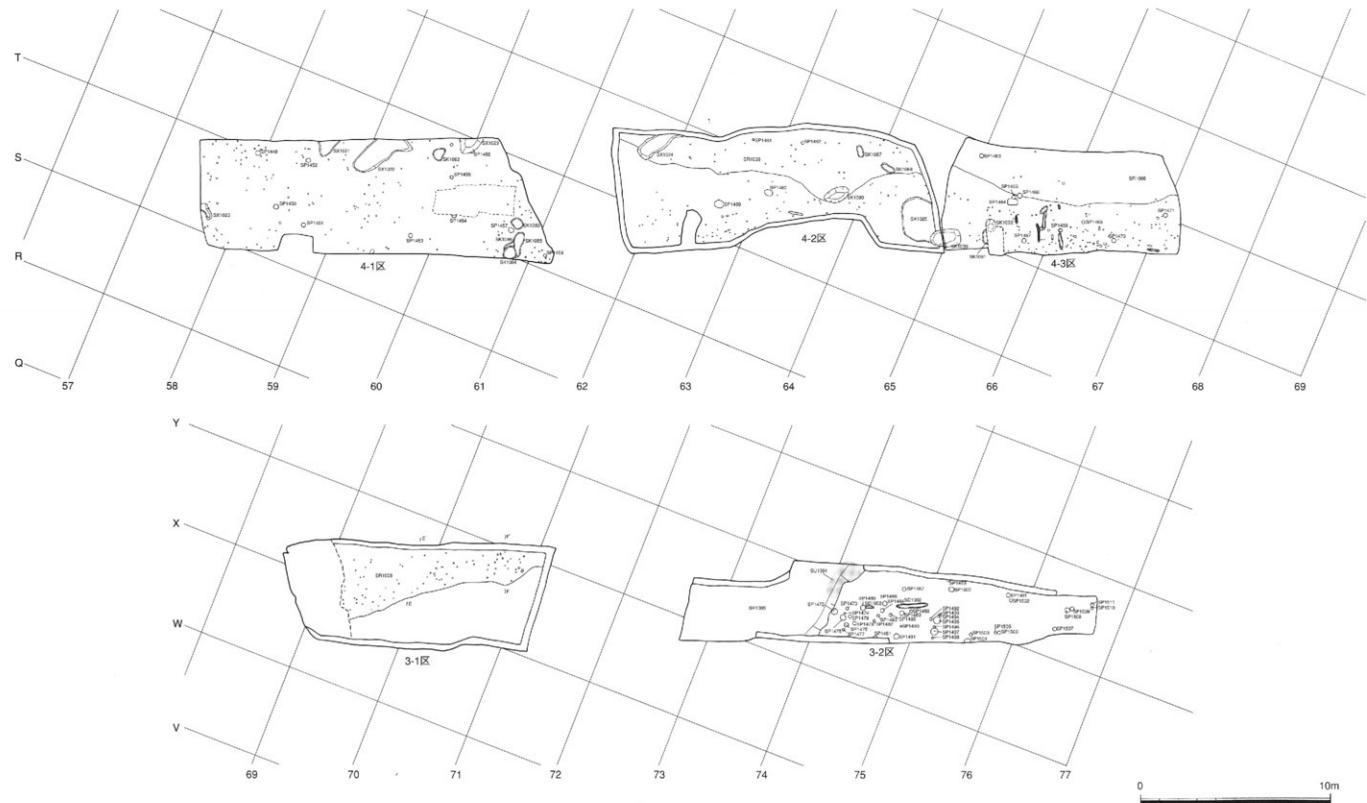
土坑32号（SK1032）（第29図）

12・11区 A-5・6で確認された土坑。遺構検出時、SB1001のEKとして捉えられていたが、出土遺物から後出することが判明した。平面形態・底面形態とともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.92m、短軸0.56m、最大深度0.22mを測る。覆土は2層で、1層は暗褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、2層はしまりが強い。また、1層中に土器片や直径20~30cm大的の礫を含む。

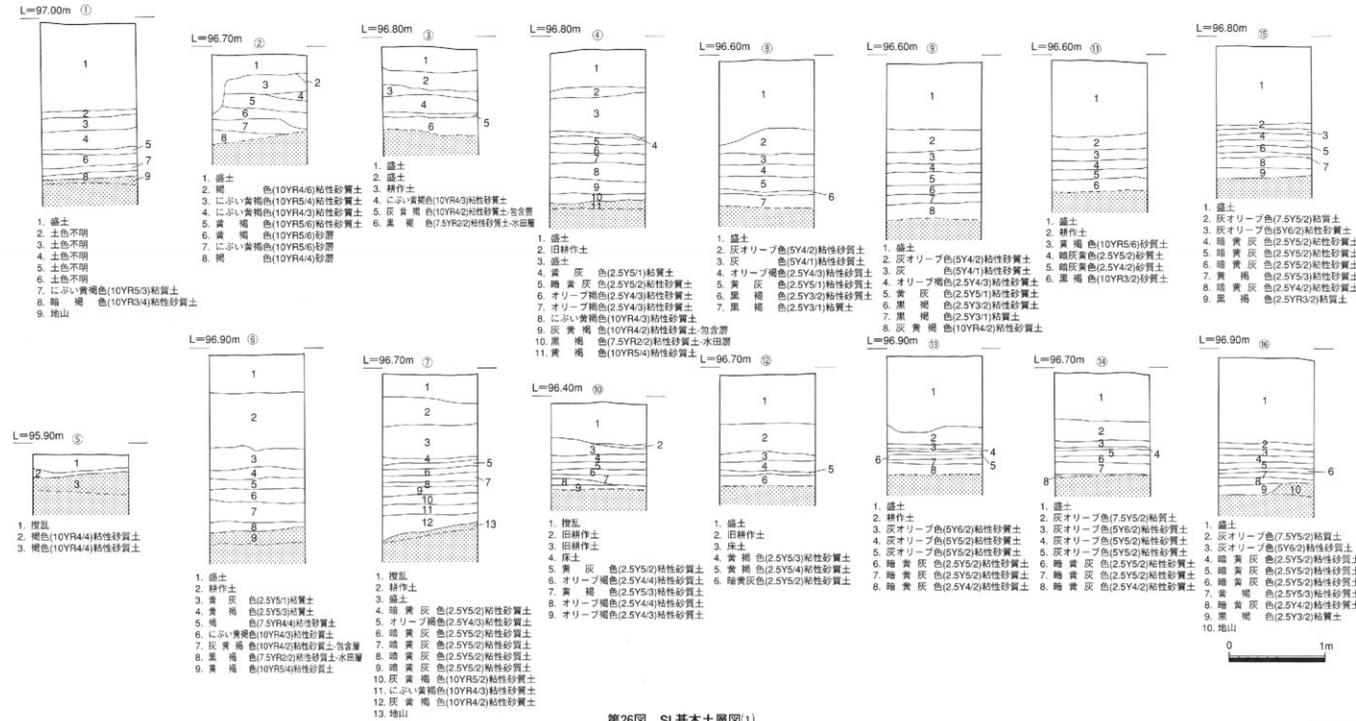
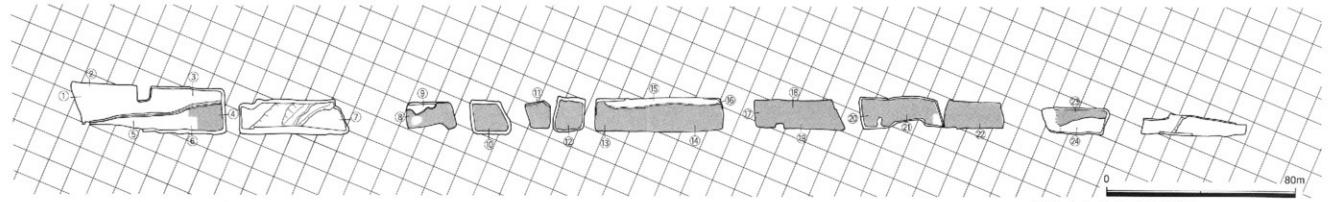
遺物は土師質土器杯・鍋、須恵質土器椀、鉄釘、鉄滓、焼土塊、弥生土器高杯が出土し、固化できたのは土師質土器杯（17・18）、鍋（20）、須恵質土器椀（19）、鉄釘（21・22）である。杯2点のうち、17の底部は静止糸切り、18の底部は回転ヘラ切りである。須恵質土器椀（19）は軟質焼成の小片で、口

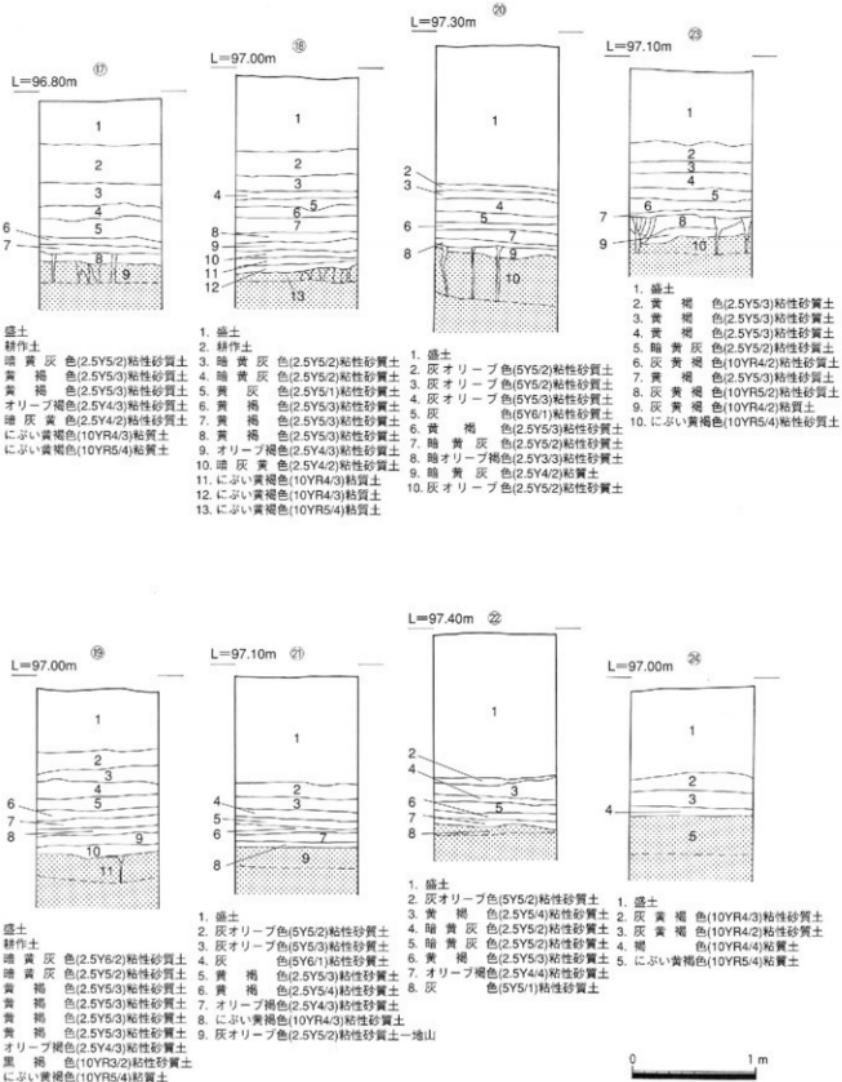


第24図 5～8区SI完掘状況図

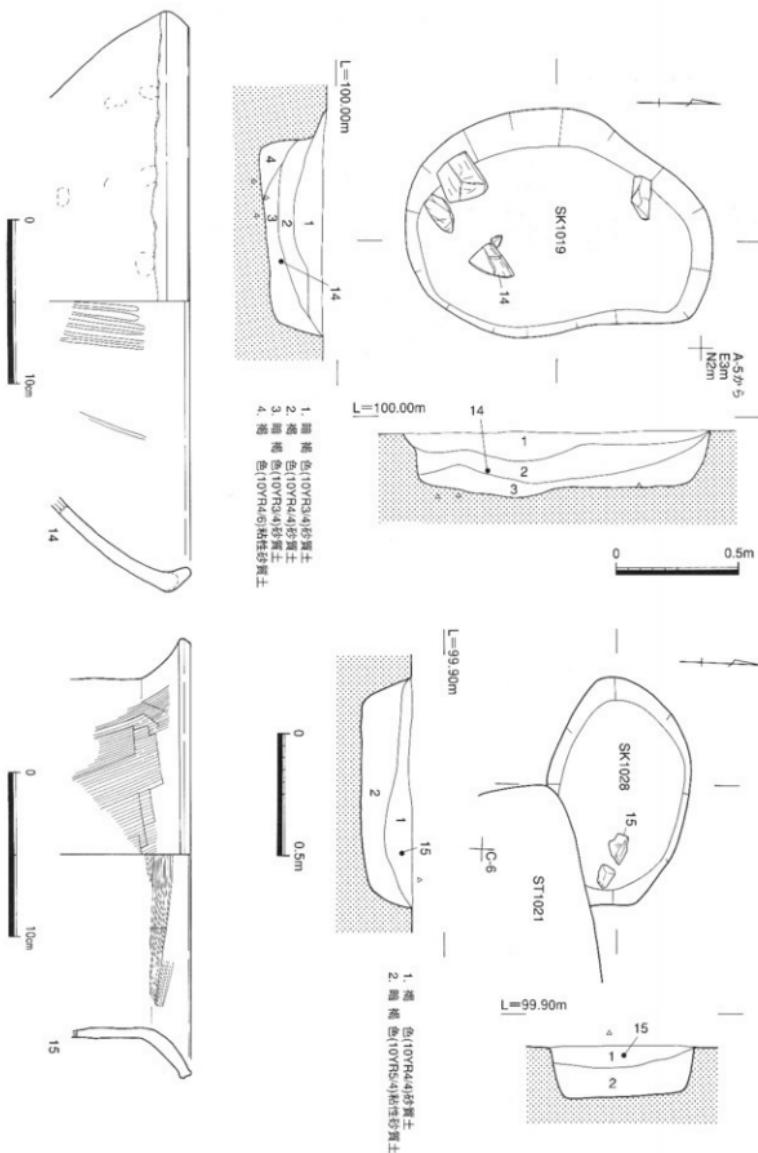


第25図 3～4区SI完掘状況図

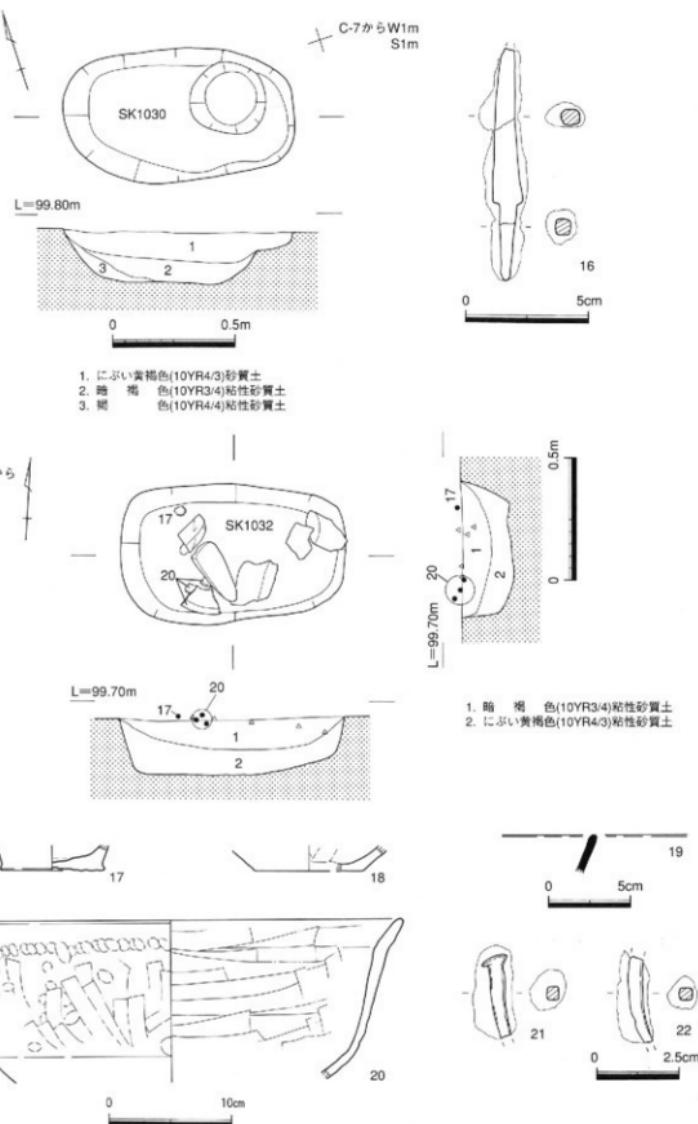




第27図 SI 基本土層図[2]



第29図 SK1019・1028遺構図・出土遺物



第29図 SK1030・1032遺構図・出土遺物

縁部に重ね焼きによる黒色帯が認められる。鍋(20)の内面底部に、煤状の炭化物の付着が認められる。鉄釘は、2点ともに断面方形を呈する。

土坑36号（SK1036）（第30図）

12・11区 B-7で確認された土坑。平面形態・底面形態はともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.70m、短軸0.60m、最大深度0.14mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土、2層は暗褐色粘性砂質土である。また直径20cm大の礫が、2層から出土した。

遺物は、土師質土器杯（23）・擂鉢（24）が出土した。23の底部は、回転ヘラ切りのちナデを施す。

土坑35号（SK1035）（第30図）

12・11区 A-7でSX1010に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.84m、短軸0.62m、最大深度0.12mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土、2層は暗褐色砂質土である。図化できた25・26は、1層からの出土である。

遺物は土師質土器杯・鍋・こね鉢、弥生土器片が出土し、図化できたのは土師質土器こね鉢（25）と鍋（26）である。26は、外面頭部を中心に煤状の炭化物が付着する。

土坑38・41号（SK1038・1041）（第31図）

12・11区 B-C-7でSK1041をSK1038が切った状態で確認された。またSK1038はSK1037に、SK1041はSP1207に切られる。SK1038の平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.58m、最大幅1.08m、最大深度0.18mを測る。覆土は3層に分層できるが、大きく2層に分けることができる。上層（1層）は暗褐色粘性砂質土、下層（2・3層）は黒褐色を呈する。2層は、地山ブロックをやや多く混入する。SK1041の平面形態・底面形態はともに不整形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.46m、最大幅0.94m、最大深度0.30mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層は黒褐色粘性砂質土である。

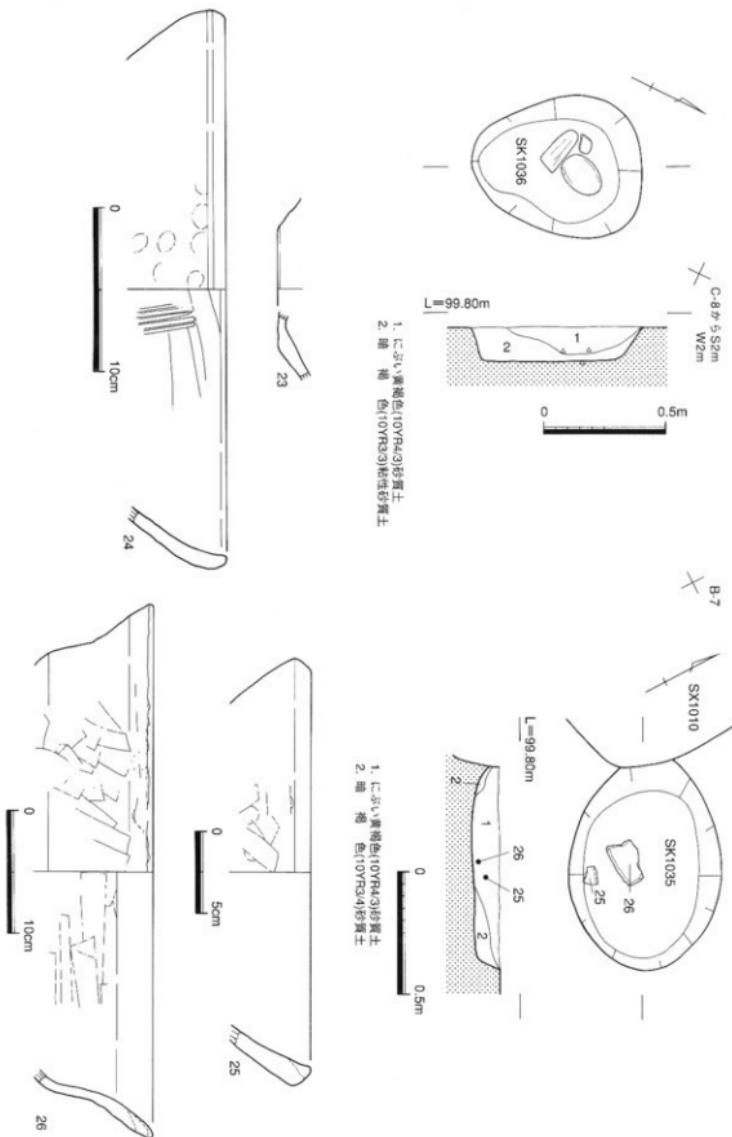
遺物はSK1038から土師質土器杯・羽釜脚部・須恵質土器輪・弥生土器片が、SK1041から土師質土器杯・小皿・甕・須恵質土器輪・甕・壁土がそれぞれ出土した。図化できたのは、SK1038では土師質土器杯（27）の1点、SK1041では土師質土器杯（28）・小皿（29）・甕（30）の3点である。杯2点（27・28）の底部は切り離し技法が不明だが、27は板ナデのちナデを、28は板ナデを施す。小皿（29）は、回転ヘラ切りである。

土坑55・56号（SK1055・1056）（第32図）

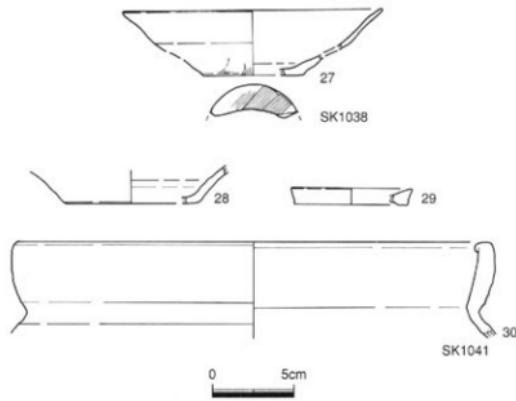
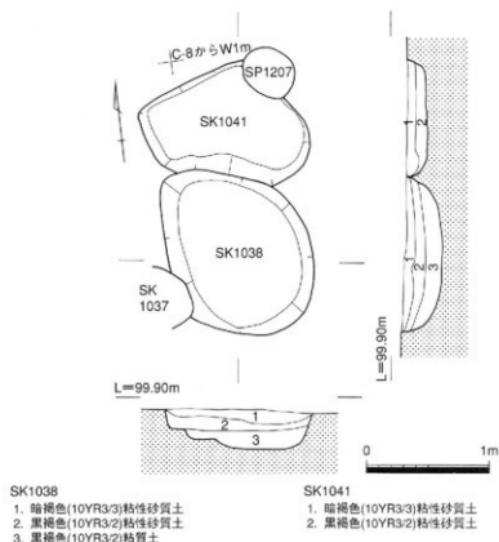
9区 D-E-14・15でSK1055をSK1056・SP1280が切った状態で確認された。SK1055の平面形態・底面形態はともに楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.20m、最大幅0.80m、最大深度0.08mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、地山ブロックをやや多く混入する。

SK1056の平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.85m、最大深度0.26mを測る。覆土は、にぶい黄褐色砂質土1層である。

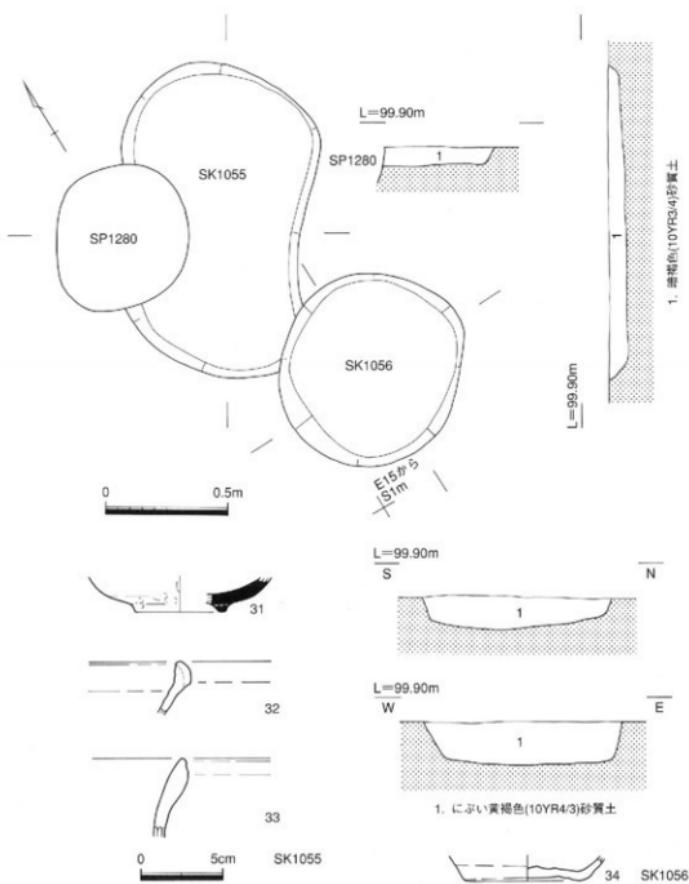
遺物はSK1055から土師質土器輪・鍋・須恵質土器輪・こね鉢が、SK1056では須恵質土器輪（31）・土師質土器こね鉢（32）・



第30図 SK1035・1036遺構図・出土遺物



第31図 SK1038・1041遺構図・出土遺物



第32図 SK1055・1056遺構図・出土遺物

鍋（33）の3点、SK1056では土師質土器杯（34）の1点である。

土坑84・85号（SK1084・1085）（第33図）

4-1区 S-T-60でSK1085をSK1084が切った状態で確認された。またSK1084は、調査区南側溝に切られる。土層堆積状況では確認できなかったものの、平面形態からSK1085は土坑2基の可能性が考えられる。SK1084の平面形態・底面形態はともに梢円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.70m、短軸0.60m、最大深度0.06mを測る。覆土は灰黄褐色粘性砂質土で、含有物の違いから2層に分層できる。1層は土器片を含み、直径15cm大の礫を含む。SK1085の平面形態・底面形態はともに不整形、断面形態は不整形を呈し、長軸1.40m、短軸0.50m、最大深度0.12mを測る。覆土は灰黄褐色粘性砂質土で、含有物の違いから2層に分層できる。2層は、地山ブロックを多く混入する。

遺物はSK1084から土師質土器杯・煮沸具片、黒色土器椀、須恵質土器椀が、SK1085から土師質土器杯・鍋、瓦質土器碗がそれぞれ出土した。図化できたのは、SK1084では黒色土器椀（35）、須恵質土器椀（36）の2点、SK1085では瓦器と思われる椀（37）の1点である。35は、内外面共に炭素を吸着する。

出土遺物から、12~13世紀の年代が考えられる。

土坑102号（SK1102）（第33図）

2区 Z-86・87でSX1026に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈すると推測でき、最大長0.70m、短軸1.00m、最大深度0.30mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土で、2層はにぶい黄橙色粘性砂質土である。1層から陶器皿（38）が出土し、2層は直径5~25cm大の砂岩・結晶片岩を多量に含む。

遺物は、蛇目釉剥ぎを施す瀬戸美濃系陶器皿（38）と上下側縁部に敲打痕が認められる砂岩製敲石（S12）が出土した。S12は、2層からの出土である。

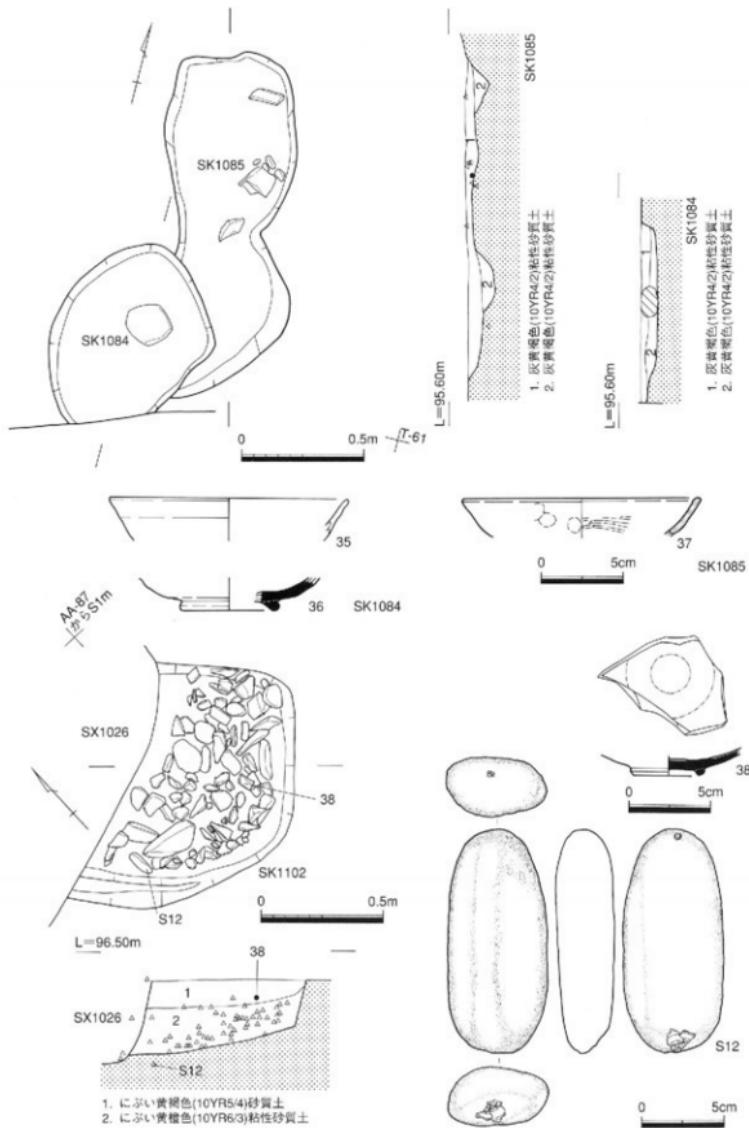
土坑103号（SK1103）（第34図）

2区 Z-87で確認された土坑。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、直径1.00m、最大深度0.26mを測る。覆土は3層に分層できるが、土色から大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）はにぶい黄褐色砂質土で、1層から陶器鑄鉢が出土した。下層（3層）は褐色粘性砂質土である。2・3層を中心に、直径3~20cm大の多量の砂岩・結晶片岩が出土した。

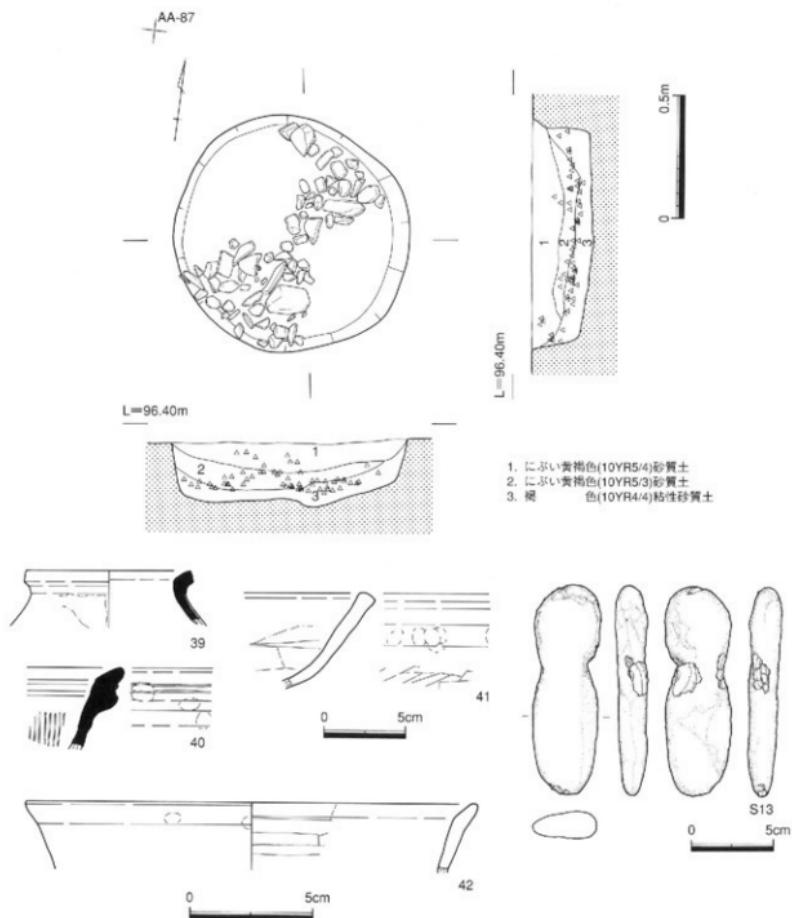
遺物は、陶器壺・鑄鉢、土師質焰烙、土師質土器鍋・羽釜・羽釜脚部・こね鉢・壁土・鉄滓・サヌカイト剥片・結晶片岩製磨石・石鍤・剥片が出土し、そのうち図化できたのは陶器壺（39）、陶器片口鑄鉢（40）、土師質焰烙（41）、土師質土器鍋（42）、結晶片岩製石錐（S13）の5点である。

土坑124号（SK1124）（第35図）

2区 AA-89・90で確認された土坑。平面形態・底面形態とともに梢円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.90m、短軸0.65m、最大深度0.20mを測る。覆土は5層に分層でき、1・2層は褐色粘性砂質土で2層は地山ブロックを多く混入する。3層はにぶい黄褐色粘性砂質土で、地山ブロックを多く混入する。4層は暗褐色粘性砂質土である。



第33図 SK1084・1085・1102構造図・出土遺物

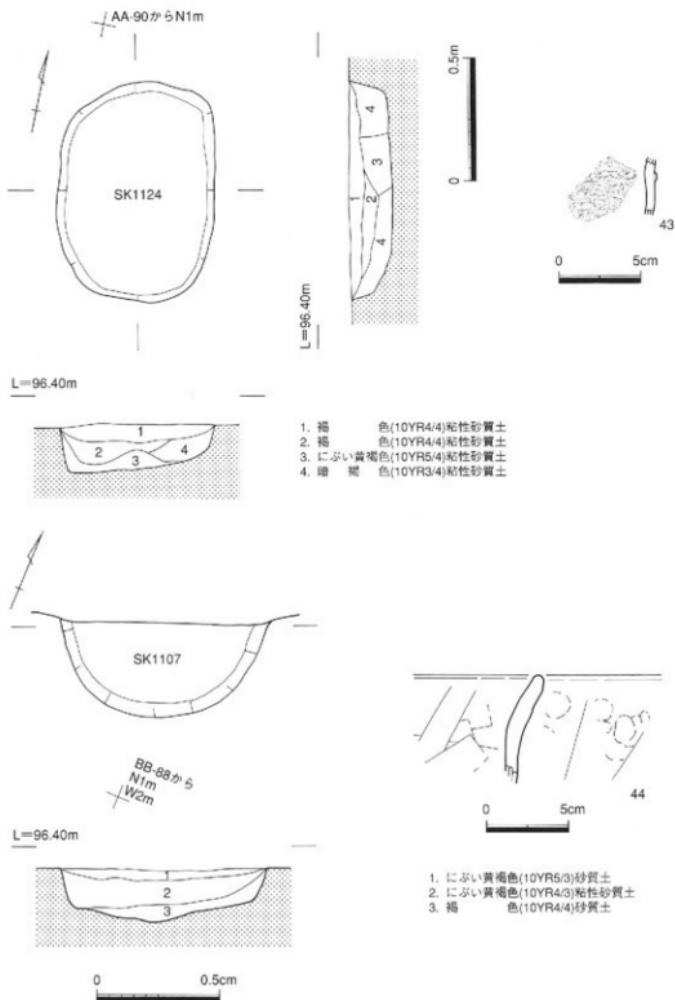


第34図 SK1103造構図・出土遺物

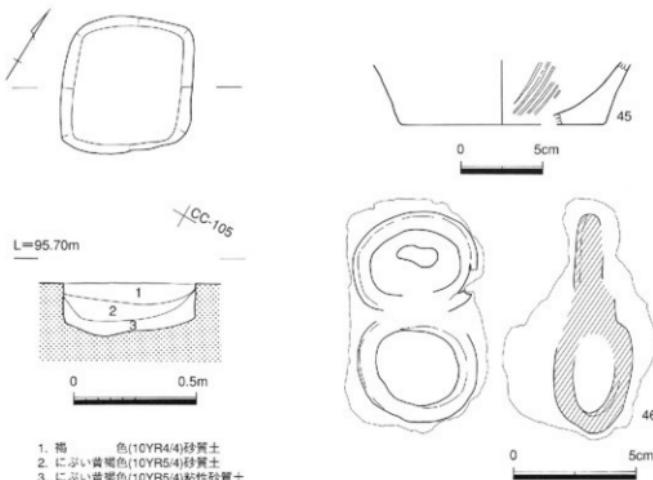
遺物は、刻目突帯文を施す縄文土器深鉢片（43）が出土したのみである。

土坑107号（SK1107）（第35図）

2区 BB-87で調査区北側溝に切られた状態で確認された土坑。調査区外に拡がるため推測だが、平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、最大幅0.85m、最大深度0.22mを測る。覆土は3層に分層できるが、土色から大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）はにぶい黄褐



第35図 SK1107・1124遺構図・出土遺物



第36図 SK1167遺構図・出土遺物

色を呈し、2層が粘性が強い。下層（3層）は褐色砂質土で、地山ブロックを多く混入する。

遺物は、土師質土器鍋・羽釜脚部、サヌカイト剥片、結晶片岩が出土し、そのうち固化できたのは土師質土器鍋（44）の1点である。

土坑167号（SK1167）（第36図）

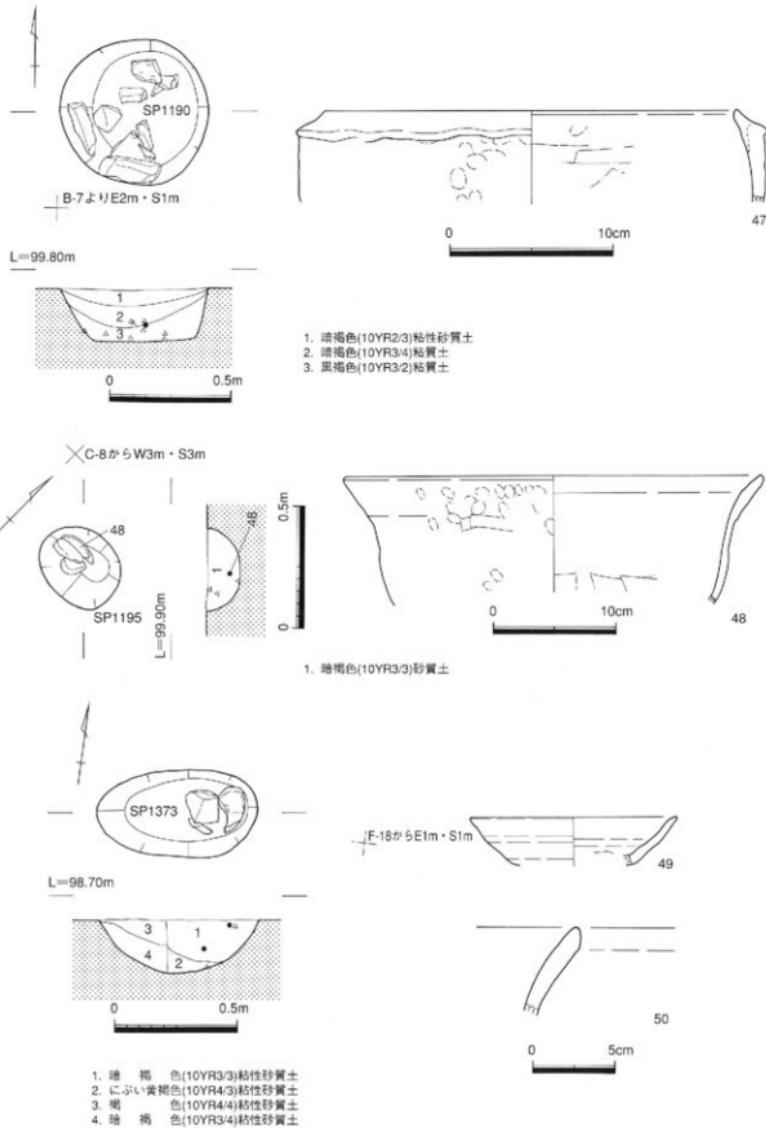
1区 CC-106で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.55m、最大深度0.22mを測る。覆土は3層に分層でき、上色から大きく2層に分けることができる。上層（1層）は褐色を呈し、下層（2・3層）はにぶい黄褐色を呈する。3層は2層と比較して粘性が強く、地山ブロックを多く混入する。また2層から鉄製品（46）が、3層から土器片が出土した。

遺物は、土師質土器擂鉢（45）、不明鉄製品（46）が出土した。46は当初鎖の一部かと思われたが、連結部分の銷が非常に厚くX線でも明瞭に見えないと、遺存部の状態から連結したように認められないで、不明鉄製品とした。

柱穴

柱穴190号（SP1190）（第37図）

12・11区 A-7で確認された柱穴。平面形態・底面形態とともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.60m、最大深度0.20mを測る。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は暗褐色を呈し、2層は粘性が強い。下層（3層）は黒褐色粘質土で、土師質土器羽



第37図 SP 遺構図・出土遺物(1)

釜（47）や直徑10~25cmの大被熱した結晶片岩や砂岩を含む。

遺物は上師質土器片・羽釜、被熱した結晶片岩や砂岩が出土し、上師質土器羽釜（47）のみ図化できた。47は退化した鈎部をもち、外外面に煤状の炭化物が若干付着する。

柱穴195号（SP1195）（第37図）

12・11区 B-7で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.36m、短軸0.30m、最大深度0.12mを測る。覆土は暗褐色砂質土1層で、直徑15cmの大の礫を含む。

遺物は、土師質土器鍋（48）のみの出土である。

柱穴373号（SP1373）（第37図）

9区 E-17・18で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.66m、短軸0.35m、最大深度0.22mを測る。覆土は4層に分層でき、1層は暗褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層は褐色粘性砂質土、4層は暗褐色粘性砂質土を呈する。1層は根石と考えられる直徑10~15cmの大の礫を含み、4層は地山ブロックを多く混入する。また1・3層を中心に、土器片が出土した。

遺物は土師質土器杯（49）、鍋（50）が出土した。

柱穴497号（SP1497）（第38図）

3-2区 Y-75で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は不整形を呈し、直徑0.40m、最大深度0.36mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から3層に分層できる。2層は他の層と比較して地山ブロックをやや多く混入し、3層から土器片が出土した。

遺物は土師質土器杯、青磁碗が出土し、青磁碗（51）のみ図化できた。51は、外間に高温による釉薬のはじけ痕が認められる。

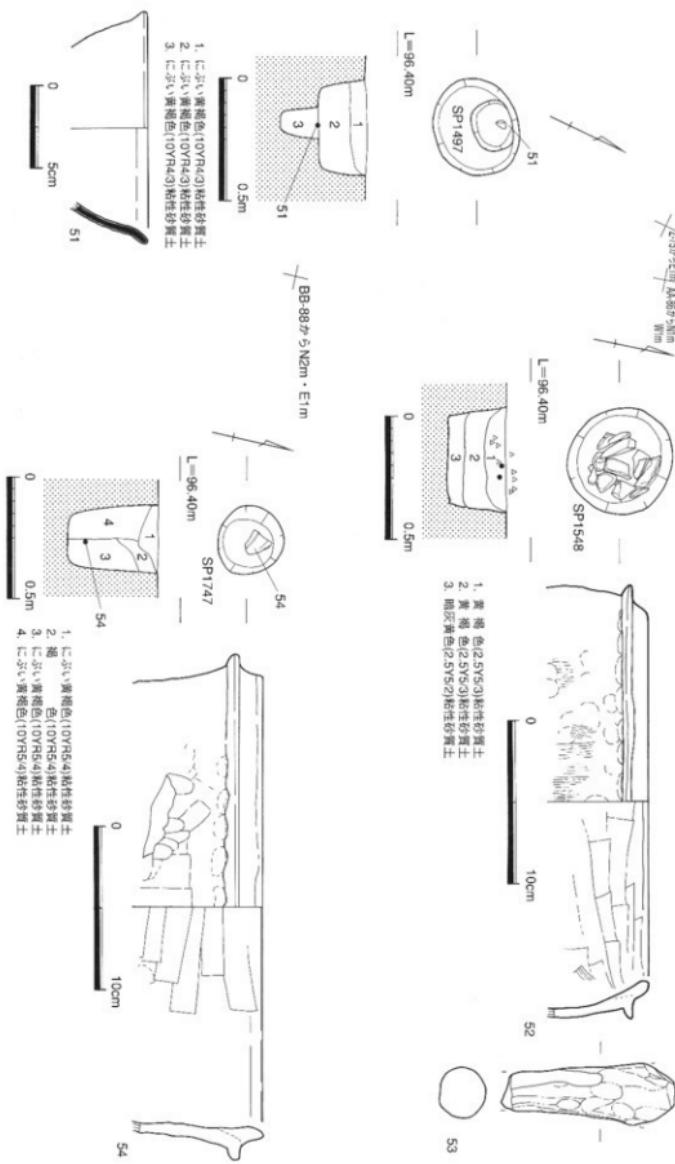
柱穴548号（SP1548）（第38図）

2区 AA-85で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直徑0.45m、最大深度0.24mを測る。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は黄褐色を呈し、1層中に直徑5~15cmの大の礫と土器片を含む。下層（3層）は、地山ブロックをやや多く混入する。

遺物は、土師質土器杯・羽釜・羽釜脚部が出土し、図化できたのは羽釜（52）と羽釜脚部（53）の2点である。図化できなかったものの、土師質土器杯は円盤状にした土台に体部に貼り付けて形成したものと思われる。52は鈎部形成時のユビオサエ痕が明瞭に残り、しっかりした鈎部をもつ。また、外側鈎部～体部にかけて、煤状の炭化物が付着する。52と53は胎土から、別個体の羽釜である。

柱穴747号（SP1747）（第38図）

2区 BB-88で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともにやや不整円形、断面形態はU字形を呈し、直徑0.30m、最大深度0.28mを測る。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、含有物の違いから4層に分層できる。3層から羽釜（54）が出土し、4層は柱痕部にあたる。



第38図 SP遺構図・出土遺物(2)

遺物は土師質土器羽釜（54）のみの出上で、鋸部形成時のユビオサエ痕が認められ、しっかりした鋸部をもつ。また、外面鋸部～体部にかけて、煤状の炭化物が付着する。また体部に、脚部の貼り付け痕が認められる。

柱穴699号（SP1699）（第39図）

2区 Z-88で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.28m、最大深度0.30mを測る。覆土は1層にはぶい黄褐色砂質上、2層は褐色砂質上で土器片を含む。

遺物は、土師質土器片・羽釜、鉄塊が出土し、土師質土器羽釜（55）のみ図化できた。55は、鋸部形成時のユビオサエ痕が認められ、しっかりした鋸部をもつ。また遺存状態は悪いものの、底部に格子目タキの痕跡が認められる。

柱穴1094号（SP11094）（第39図）

1区 CC-101で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.55m、短軸0.42m、最大深度0.04mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土1層で、直径15～20cm大の被熱した結晶片岩を含む。

遺物は土師質土器杯・羽釜が出上し、図化できたのは羽釜（56）のみである。56は退化した鋸部をもち、体部に煤状の炭化物が付着する。

柱穴1062号（SP11062）（第39図）

1区 CC-101で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.25m、最大深度0.12mを測る。覆土はぶい黄褐色を呈し、含有物から3層に分層できる。1層から土器が出上し、土師質土器杯（57）が底部を下にした状態で出土した。また2層は、地山ブロックをや多く混入する。

遺物は、土師質土器杯（57）のみの出土である。57の底部切り離し技法は不明だが、底部に粗い板ナデを施す。また外側に、炭化物がやや多く付着する。

柱穴864号（SP1864）（第39図）

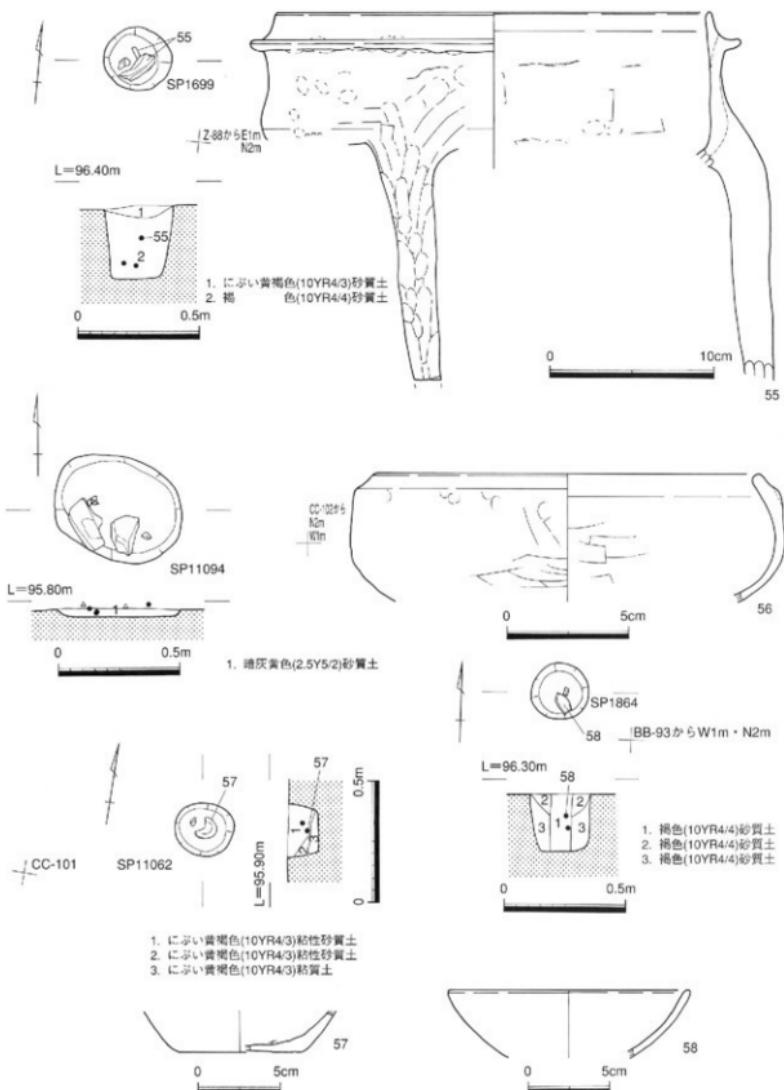
1区 BB-92で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態はU字形を呈し、直径0.25m、最大深度0.21mを測る。覆土は褐色を呈し、含有物の違いから3層に分層できる。また1層が柱痕部にあたり、土師質土器杯（58）が出土した。3層は、地山ブロックを多く混入する。

遺物は土師質土器杯・煮沸具片、須恵質土器碗が出上し、土師質土器杯（58）のみ図化できた。

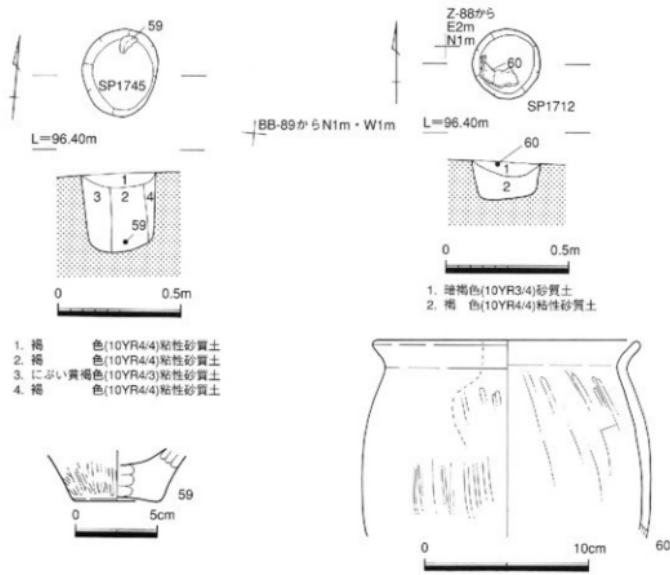
柱穴745号（SP1745）（第40図）

2区 BB-88で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態はU字形を呈し、直径0.36m、最大深度0.32mを測る。覆土は概ね褐色を呈し、含有物の違いから4層に分層できる。また2層は柱痕部にあたり、弥生土器壺（59）が下位から出土した。4層は、地山ブロックを多く混入する。

遺物は、弥生土器壺（59）のみの出土である。



第39図 SP 遺構図・出土遺物(3)



第40図 SP 遺構図・出土遺物(4)

柱穴712号 (SP1712) (第40図)

2区 Z-88で確認された柱穴。平面形態・底面形態とともに円形、断面形態は逆台形を呈し、直径0.30m、最大深度0.16mを測る。覆土は1層は暗褐色砂質土、2層は褐色砂質土である。1層上位から、口縁部を下に向かた状態の弥生土器壺(60)が出土した。2層は、地山ブロックを混入する。

遺物は、弥生土器壺(60)のみの出土である。60は磨滅のため調整不明瞭だが、内外面ともにミガキを施す。また、体部に煤状の炭化物が若干付着する。

柱穴内出土遺物 (第41・42図)

61は12・11区 A-4で検出したSP1055から出土した土師質土器杯である。底部静止糸切りで、体部が外上方へ直線的に立ち上がる。

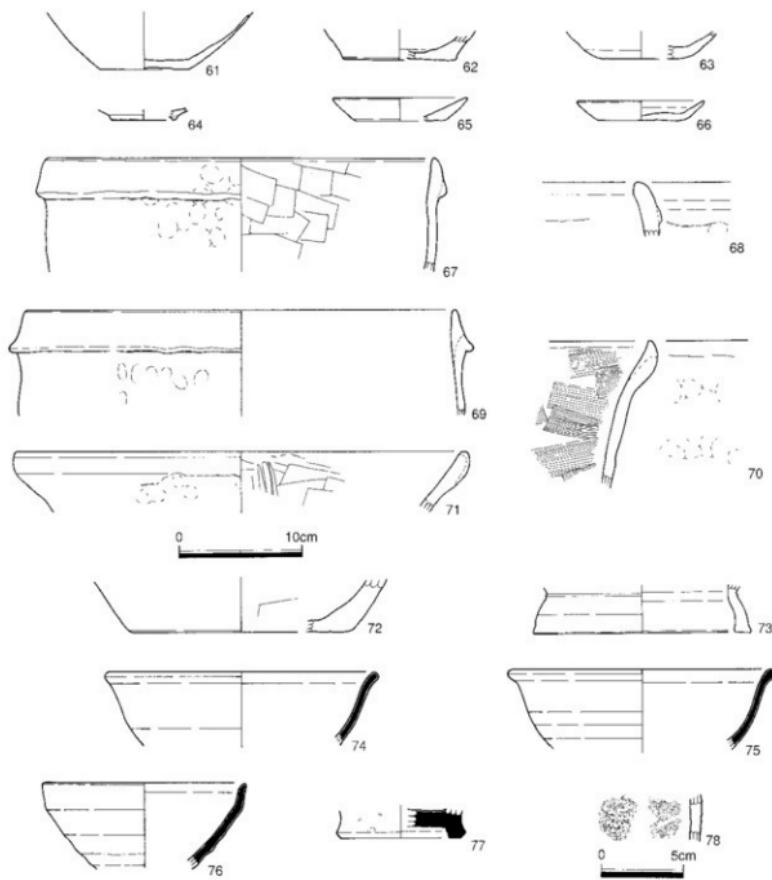
62は12・11区 A-5で検出したSP1160から出土した土師質土器杯で、底部回転ヘラ切りである。

63は1区 AA-99で検出したSP11007から出土した土師質土器杯である。同遺構から弥生土器片も出土しているが、混入物と推定できる。63は遺存状態が悪いものの、底部回転ヘラ切りと思われる。

64は7-2区 J-36で検出したSP1436から出土した土師質土器碗で、低い高台部をもつ。

65は9区 D・E-16で検出したSP1311から出土した土師質土器小皿で、底部回転ヘラ切りである。

66は1区 BB-92で検出したSP1841から出土した土師質土器小皿である。底部は回転ヘラ切りである。



第41図 SP 出土遺物(1)

67は7-1区 J・K-34で検出したSP1427から出土した土師質土器羽釜である。煤状の炭化物が、口縁部内面で筋状に付着している。

68は12-11区 A・B-7で検出したSP1188から出土した土師質土器羽釜である。貼り付け形成した非常に退化した鰐部をもつ。また、焼土塊が共伴する。

69は2区 BB-88で検出したSP1768から出土した土師質土器羽釜である。垂下気味の鰐部を持ち、内外面に煤状の炭化物が付着する。

70は12-11区 B-6で検出したSP1141から出土した土師質土器鍋である。内面は、ハケメ状の板ナデを施す。

71は12-11区 B-6で検出したSP1128から出土した土師質土器擂鉢で、土師質土器片、須恵質土器片、弥生土器片が共伴する。

72は8区 J-33で検出したSP1413から出土した土師質土器こね鉢で、土師質土器片・煮沸具片、須恵質土器碗が共伴する。

73は12-11区 B・C-8で検出したSP1230から出土した土師質土器不明脚部である。壺の口縁部かと思われたが、端部の形状から脚部の可能性が強いと考えた。同造構から白色を呈する土師質土器杯と弥生土器片が共伴したが、弥生土器片は混入物と考えられる。

74は3-2区 Y-75で検出したSP1496から出土した青磁碗である。共伴遺物は認められなかった。

75は12-11区 B-7で検出したSP1211から出土した青磁碗である。底部回転ヘラ切りの土師質土器杯が共伴する。

76は12-11区 A-5で検出したSP1080から出土した天目茶碗である。土師質土器片と煮沸具体部片が共伴する。

77は2区 AA-86で検出したSP1607から出土した白磁瓶の底部である。共伴遺物は、認められなかつた。

78は1区 CC-108で検出したSP11151から出土した押引刺突と沈線文を施す繩文土器片である。図化できなかつたものの、サヌカイト剥片が共伴する。

S14は1区 AA-92で検出したSP1883から出土したサヌカイト製石鏃である。凹基式石鏃で、先端部が欠損する。

S15は2区 Y-86で検出したSP1588から出土したサヌカイト製楔形石器である。左右側縁部が、欠損する。上下左右側縁部に打面が認められる。

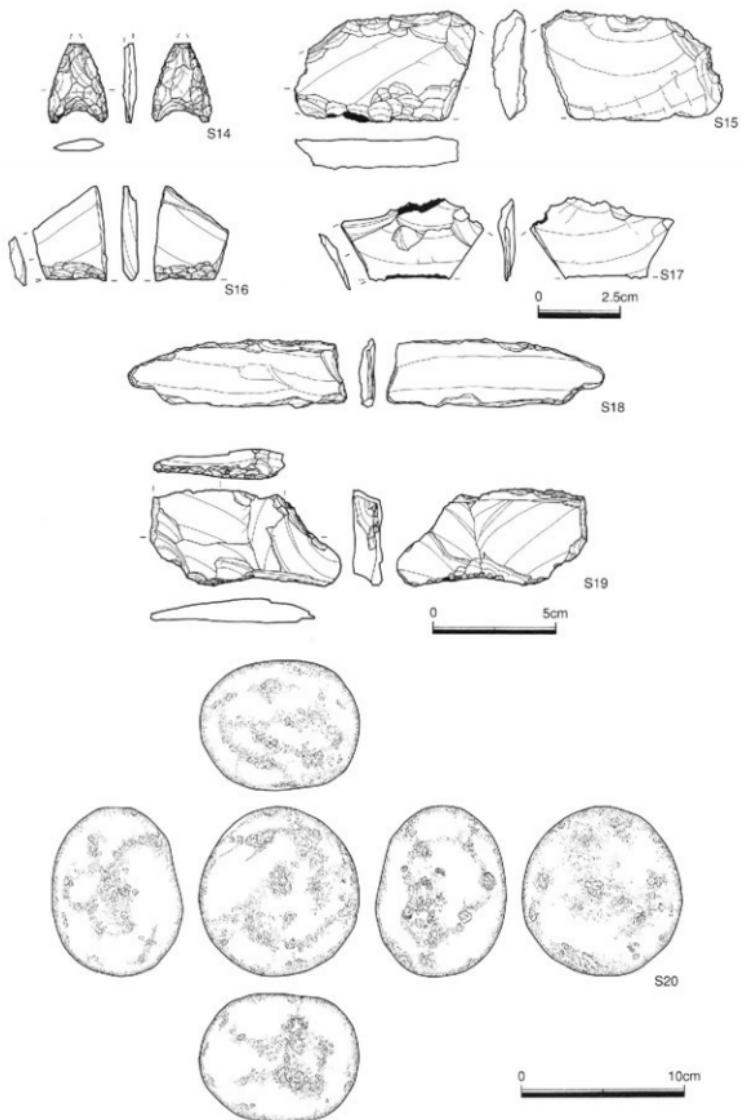
S16は2区 BB-87で検出したSP1666から出土したサヌカイト剥片である。

S17は2区 Y・Z-87で検出したSP1633から出土したサヌカイト剥片である。

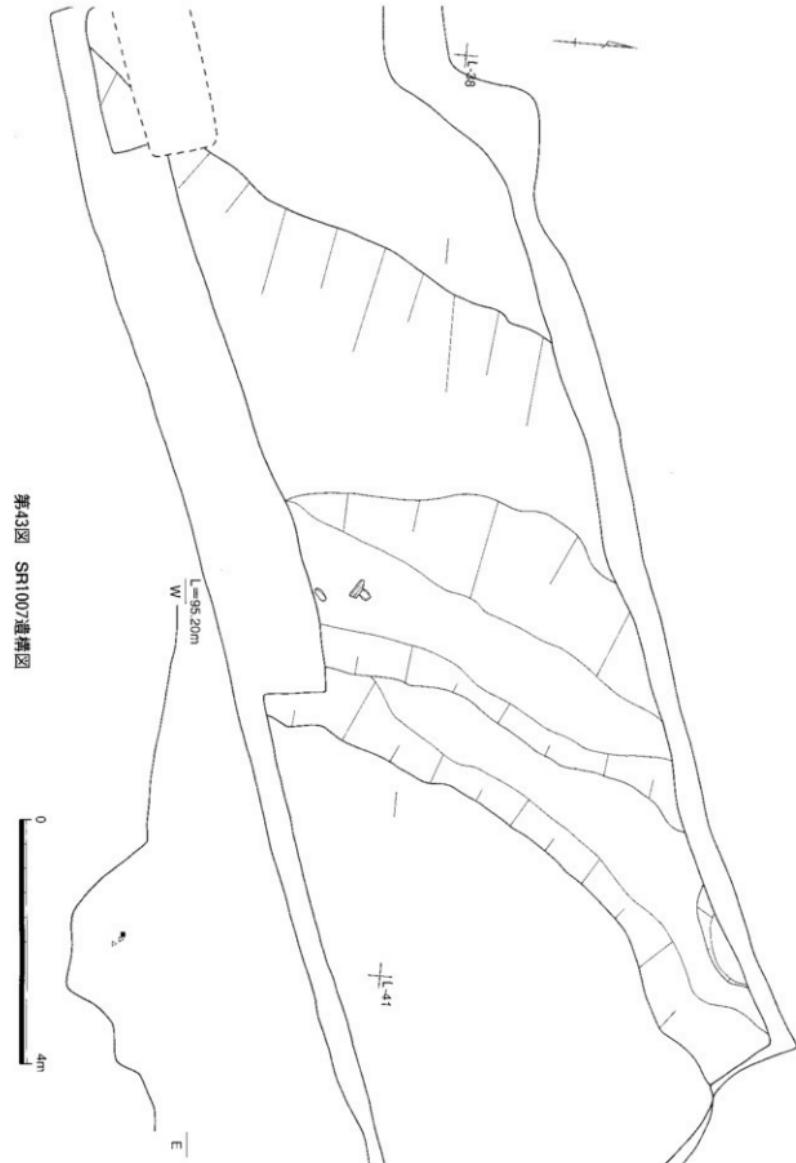
S18は2区 BB-87で検出したSP1797から出土した打製石庖丁である。結晶片岩の横長剥片を用い、平刃・单刃をもつ。図化できなかつたものの、弥生土器片、サヌカイト剥片が共伴する。

S19は1区 BB-92で検出したSP1838から出土したサヌカイト製削器である。平刃・複刃をもつ。共伴遺物は、認められなかつた。

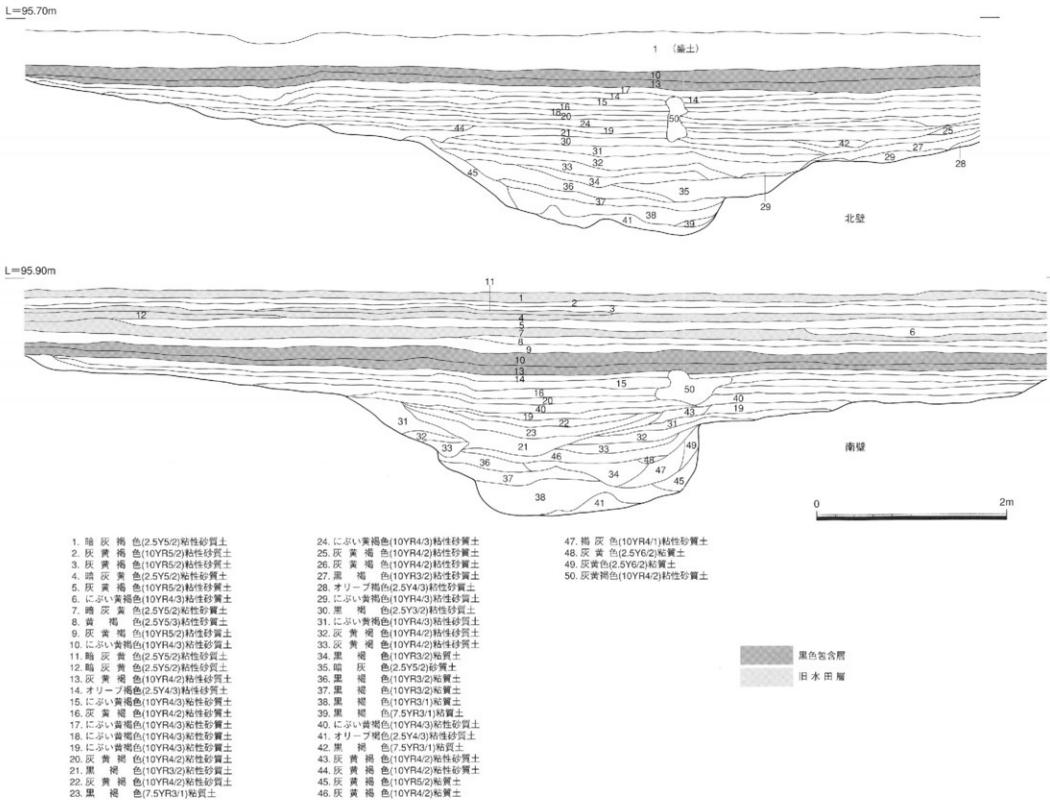
S20は9区 E-17で検出したSP1336から出土した砂岩製敲石である。6面全面に、敲打痕が認められる。共伴遺物は、認められなかつた。



第42図 SP 出土遺物(2)



第43図 SR1007遺構図



第44図 SR1007断面図

自然流路

自然流路 7号（SR1007）（第43～46図）

7-3-6-1区で確認された自然流路。調査区の北東および南西方向にさらに延びるため、今回の調査では流路の一部が確認されたにすぎない。流路の長さは、調査対象地内では最大長16.03mを測る。

流路の断面形態は不整逆台形で、最大深度1.17mを測る。調査区内では幅7.90mを測るが、本来はもっと幅広く、北東方向から流れてくるため北壁では捉えきれなかったが、南壁では幅11.20mを測る。

7-3区の北壁・南壁では、流路内堆積土とあわせて50層に分層できる。基本的に四駆の土層堆積状況は類似し、概ね搅乱、現在の耕作土、盛上、旧水田面と砾土・床土との互層、黒色包含層、遺構面となる。7-3区も流路埋没後は、周辺の調査区と同じように水田として利用されてきたと考えられる。

流路内覆土は14層以下が該当し、南壁で28層、北壁で27層にそれぞれ分層できる。21・26・28・30・33・45・46・48・49層は地山ブロックを含み、特に33・45・48・49層では混入率が多い。また39層では、灰オリーブブロック土を多く混入する。1・2・5・8・11の5層で、少量の土器片を含む。土器片を含むこの5層は、現在の水田面（1・2層）と旧盛土層（5・8・11層）にそれぞれ該当する。

流路内から、土師質土器碗・杯・煮沸貝片、須恵質土器碗、鉄滓、焼土塊、須恵器、サヌカイト剥片、弥生土器壺、結晶片岩製石鏡、炭化材が出土した。これらの中で図化できたのは、弥生土器壺（79・80）と結晶片岩性石鏡（S21）の3点である。79・80の2点は遺存状態が悪いものの、79の体部にタタキが認められる。また炭化材は、南壁の24層中、もしくはその直上から出土した。

自然流路 8号（SR1008）（第46図）

3-1区・4-2区・4-3区・5区で確認された自然流路。調査区の東西方向にさらに延びるものと思われ、東側では3-2区で確認されたSR1009と合流するものと思われる。西側にあるSR1007とは、同一流路の可能性も考えられる。

調査範囲内の流路の長さは65.50m、最大幅3.90m、流路の断面形態は不整形で最大深度0.38mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘質土、2層はオリーブ褐色粘質土である。2層は、地山ブロックをやや多く混入する。

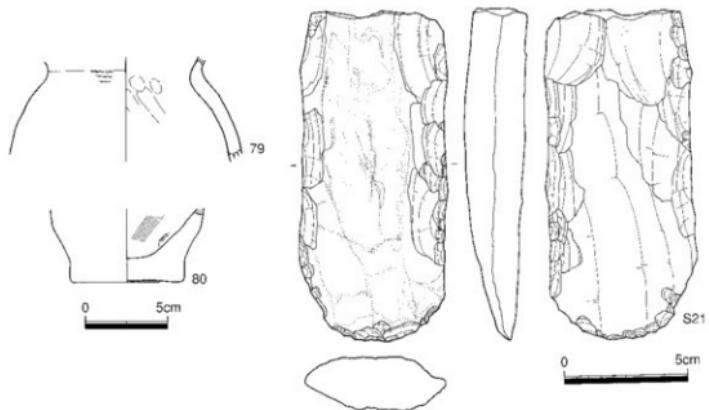
小片のために図化できなかったものの、流路内からタタキを施した弥生土器片が出土した。

土壙墓

土壙墓 2号（ST1002）（第47図）

12・11区 A-1で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに円形、断面形態は舟底形を呈し、直径1.10m、最大深度0.24mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物から2層に分層できる。1層中に直径5～40cmの大結晶片岩・砂岩を多く含む。

遺物は、土師質土器鍋・土師質土器片、須恵質土器片、蛇ノ目釉剥ぎを施す肥前系磁器碗が出土したが、図化できるものはなかった。



第45図 SR1007出土遺物

土壙墓12号（ST1012）（第47図）

12・11区 A-3・4で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.30m、短軸0.80m、最大深度0.32mを測る。覆土は暗褐色を呈し、含有物から3層に分層できる。3層が粘性が一番強く、2・3層ともに地山ブロックを多く混入する。

遺物は土師質土器鍋、焼土塊、鉄片が出土し、図化できたのは土師質土器鍋(81)のみである。81は、ST1006から出土した鍋と同一固体である。

土壙墓15号（ST1015）（第48図）

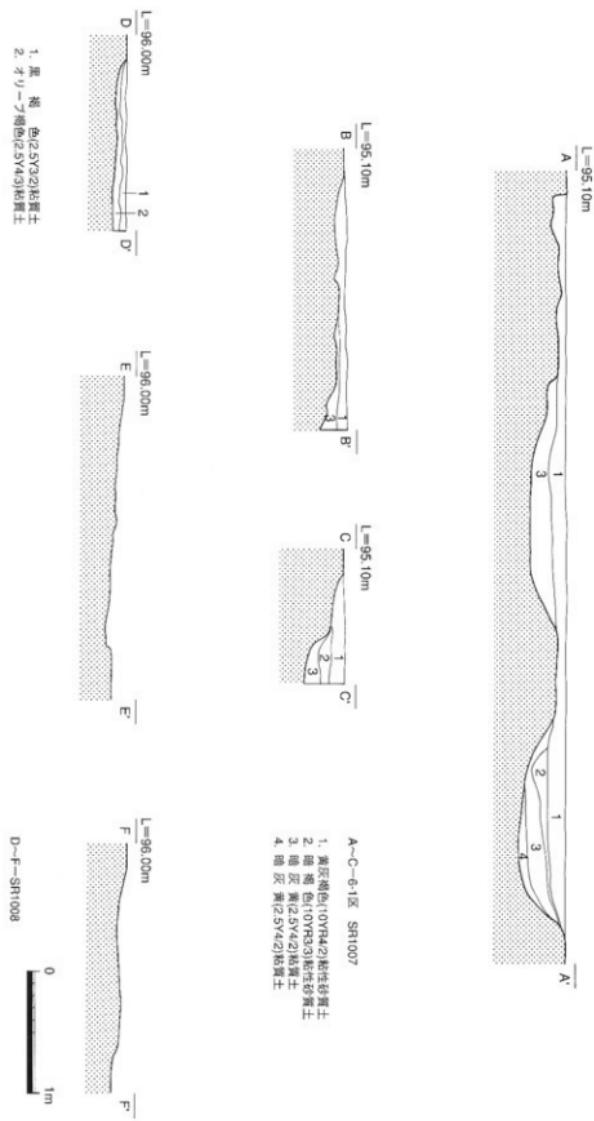
12・11区 A-5で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.42m、短軸0.90m、最大深度0.14mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、土師質土器杯(82)、須恵質土器擂鉢(83)が出土した。83は、ST1001出土擂鉢と接合する。

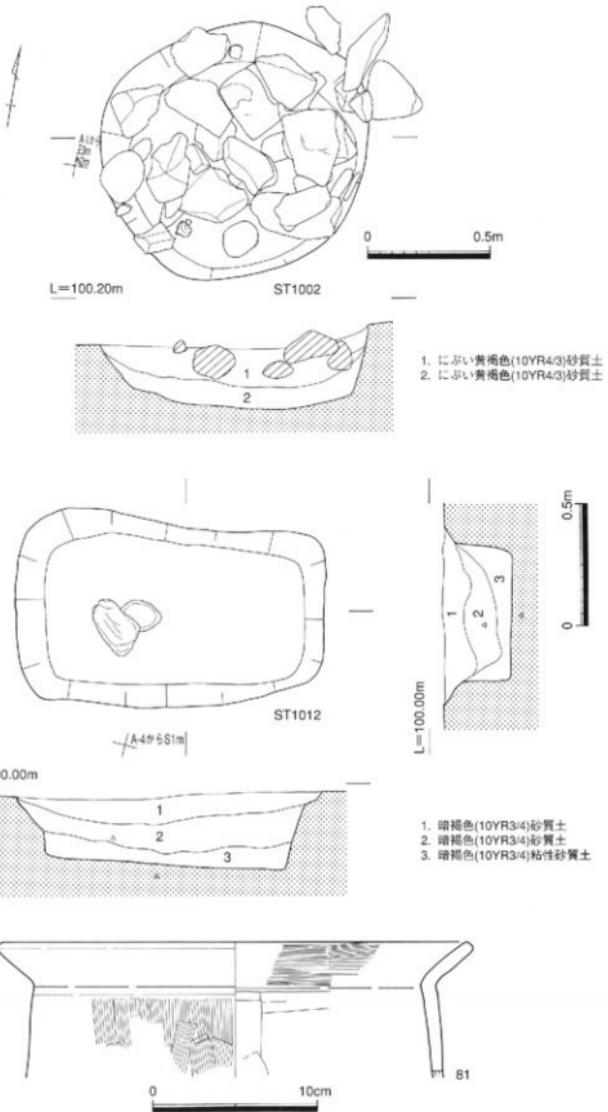
土壙墓16号（ST1016）（第48図）

12・11区 A-5でSK1019に切られた状態で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.14m、短軸0.84m、最大深度0.36mを測る。土層の堆積状況は、不明である。

遺物は、土師質土器片、上鍤、焼土塊、鉄塊、弥生土器片が出土したもの、小片のため図化できるものはなかった。



第46図 SR1007・1008断面図



第47図 ST1002・1012遺構図・出土遺物